女鑑

明治三十三年十一月二十四日發兌

第貳百拾七號

國光社

女鑑第貳百拾七號

目錄

稟告

從來本誌の發賣に係る事務は國光社雜誌部に於て取扱ひ居候處向後東京市京橋區南傳馬町壹丁目七番地靜思館に於て取扱ひ候事に致候間自今國光及女鑑に關する御照會、御送金、御通知等は總て必靜思館宛にて御發信被成下度候也

追て編輯に關する件は從來の通り國光社編輯部宛にて御發信被成下度候

東京京橋區築地二丁目廿一番地
國光社編輯部

明治三十三年十月

東京京橋區南傳馬町一丁目七番地
靜思館
（電話本局千三百七番）

貴婦人用帯締

●野口小蘋女史考案並畫







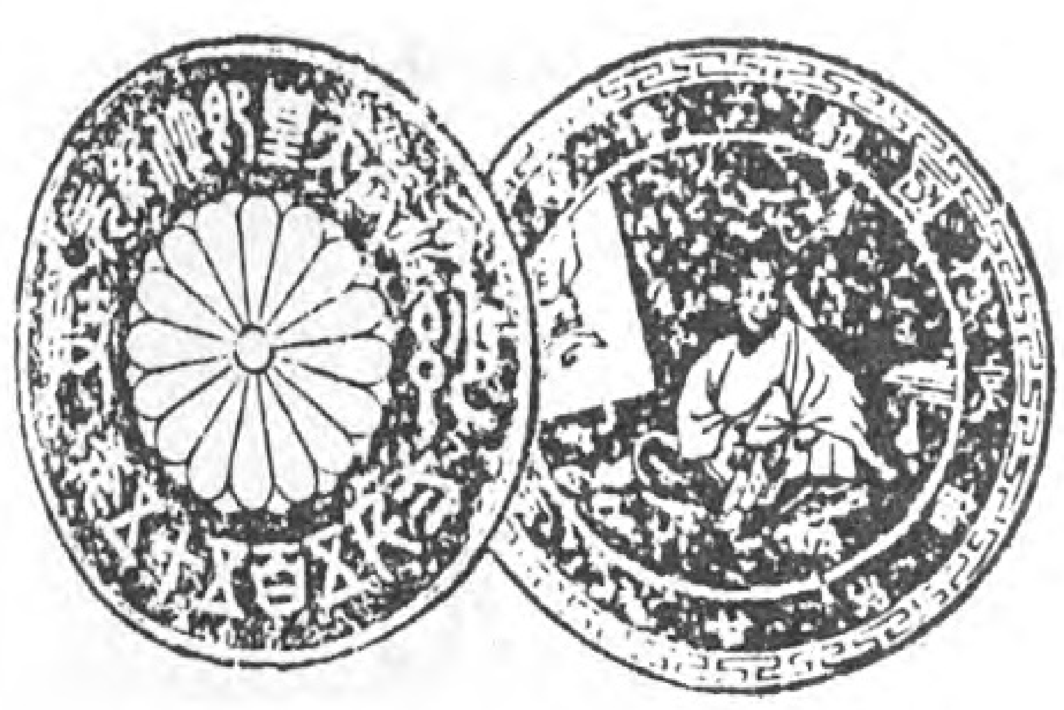
◎金、白金、赤銅朧銀等の金屬を用ひて彫刻を施せしもの

甲價	六拾圓
乙價	五拾圓
丙價	四拾五圓
丁價	四拾圓
戊價	參拾七圓
己價	參拾參圓
庚價	參拾壹圓
辛價	貳拾九圓
壬價	貳拾七圓
癸價	貳拾五圓

◎金又はプラチナ地にダイヤモンド、エメラルド、ルユビー、サフアヤ眞珠等の寶石寶玉を装嵌したるもの

丙價	八拾五圓
己價	五拾圓
壬價	貳拾圓
乙價	百圓
戊價	六拾五圓
辛價	參拾圓
甲價	百貳拾圓
丁價	七拾圓
庚價	四拾圓
癸價	拾五圓

右の金ものは何れも名工の手に成り紐は織物或は種々の新形又は古代の組方に倣ひたる絹打にて其製作都て壯麗にして優美なり尤も彫刻の疎密あるひは寶石の大小に依りて代價にも高下あれは冀くは車を枉げて弊堂に臨み其現品を御覽じ玉ひ但し遠隔の地なれば郵便にて御注文を下し玉へ代金御送附次第その價に相當の品を精撰して調進し參らせ聊にても御信用に背く事は候はず若し思召に適はざる時は交換し玉ふとも原價を取戻させ玉ふとも御望の隨意に候ふべし其手續ともは屢々新聞紙に報告したる弊堂店則に詳なり



妙技一等賞牌

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七十八番地

時計及寶玉類 貴金屬美術品 商 (電話番號本局 三百三十三)

天賞堂

東京市神田區小川町十九番地 (電話架設中)
天賞堂 小川町 出張所

大阪市南區心齋橋北詰北ニ入ル (電話番號七百三十三)
天賞堂 大阪 出張所

名古屋市本町通玉屋町二丁目十七番戸
天賞堂 名古屋 出張所

廣島市大手町三丁目六十五番地
天賞堂 廣島 出張所

熊本市唐人町通上鍛冶屋十番地
天賞堂 熊本 出張所

長崎市萬歳町上野屋方
天賞堂 長崎臨時 出張所

北海道小樽色内町越中屋方
天賞堂 小樽臨時 出張所

そめ女

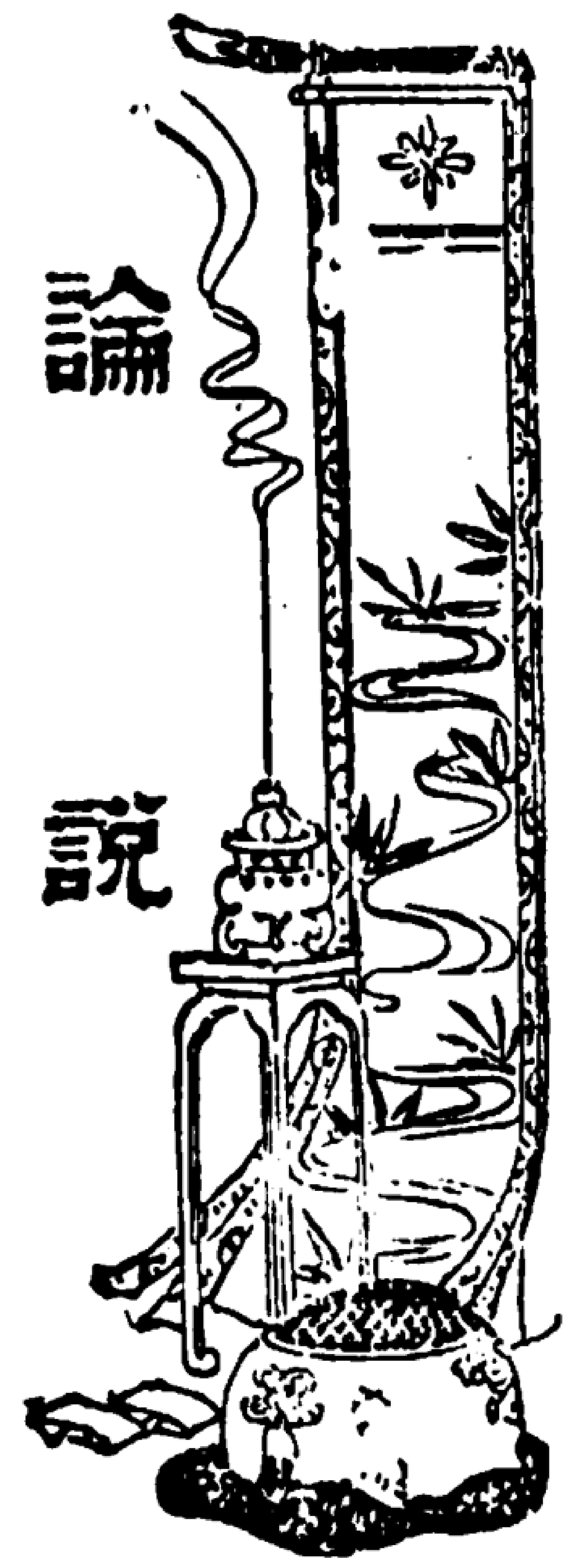


古來の教訓

他の善は、以つて模範とすべし。他の惡は、以つて戒愼の資と爲すべし。我が心だに善に進まむことを希ふものあらば、世間善惡萬般のこと、すべて以つてわが教となすことを得べきなり。如何に況んや、婦人のためにとて物せられたる教訓といはるゝものに於いてをや。

徒に新奇を競ひて、三千有餘年以來、健康を維持したる米飯を奇ならずとして麵麭に代へむとするもののある世には、幾百年以來、婦人の徳操と規律と和樂とを保たしめたる女大學を陳腐なりとして、之を焚き盡さむことを計る愚者あることは、寧ろ、怪訝むに足らずといへども、婦人の將來のために之を思へば、いまだ、危惧の念を禁ずる能はざるなり。多くの議論を要せず。世人の最も排斥するところの彼の三從七去なり。之を實際に、わが婦、わが嫂の上にして考へよ。先づ、我が意につのりて父母に隨はざるものあらば如何。飲食攝生に心を用ゐること能はず

して、子孫を保育することも能はざるものならば如何。更に、其の害を將來にまで貽すべきものならば如何。隣保の交際をやぶる多言、固より好ましからぬ事なるべし。然もなきことに罵り騒ぎ、さらぬことにも、疑をなして、家庭に波瀾をたたしめざる嫉妬ぶかきものも、亦、はなはだ、疎しきものたることを免れざらむ。其の他、淫欲ぶかきもの、盗心あるもの、いづれか、わが婦わが嫂として耻ぢざることを得むや。人の上として、猶且、耻ぢざるを得ざるものを、之を我が身に行ひて、誰か、耻づるとなしといはむや。而かも、此等の教訓を以つて陳腐見るべからざるものとして排斥せらるべきか。若し夫れ、女子のために物せられたる教訓を濫用して、婦人を迫害せんとするもの〻罪は、いふまでもなきとなり。世には、小辱を忍ぶ能はずして、而かも、大耻を顧ざるもの尠からず。彼の新奇をのみ競ふ近視眼者流のために、頑固と稱せらる〻を忍ぶ能はずして、將來永遠の幸福をすて〻顧みざらむとするものあり。口惜しき極ならずや。



論說

女品論（天）

三輪田眞佐子

識者、あるは、君子の境界に進みし人は、別ならんも、通常男子の、女子を評するところを聞くに、先づ外貌の美醜を以てするもの多きが如し。女子自らも、化裝をつとむるは、多數婦人の習なり。元より容姿の美なるは、女子のみならず、男子に於ても害あるにあらず、往々美人薄命の例あれども、それと同時に、美貌が幸福の種となることも、亦少からず。現に縁談などには、美觀の女子こそ、醜婦よりも求むるもの多からめ。從ひて、結婚も早きは、世上の事實ならずや。さればとて、美のみが、婦人の要件にあらず。

されど品性劣等なる下等社會に於ては更なり。富貴の家に生れし人々にても、高尙なる精神なきものは、先づ美醜を以て女子の價値を定むる習なるのみならず、俗智を以て考ふるときは、美人は、男女を問はず、一見人より能く記憶せらるゝ、利益あるなり。亦子孫に、容貌は遺傳するを以て、末世のためにも、美貌は利益の基となるなきにあらず、されど、これと同時に、人は美に誇り、身を害ひ、家を滅す例もあれば、美は幸か不幸か知るべからず。

眞正に、人を撰ぶ標準をすべきものは、先づ心術の卓拔なるもの、次に身體の健全なるもの、其の次に於て、比較上容貌は、醜よりも、美を取るは可なり。なほその次は財も有るは無きに勝る

べし。然るに、婦人を求むる人は、多くは財を問ひ、美を正すがごとし。おのれ思ふに、衣食住は、人生に缺くべからざるを以て、經濟思想なきものは、文明の世に立つこと能はざるを以て、財も賤むべきにはあらざれども、必竟財の貴き所以は、自個獨力の勞力と効績との結果を見るべければこそ。然るに、勞もなく、効もなくして、唯婦人の持參金などを目的とする結婚こそ心の醜はたとへんにものなかるべし。亦美貌は、人の感情を以て判別するものなれば、美を好み、醜を惡むは、情のみより言へば理なしとせず。されど美貌は見慣るればおのづから鈍くなりて、更に美を悅び、醜を厭ふを覺えざるに至るべし。加之、人は精神的の交際を親しくするにつれて、外容の如何は別に關係なきに至るは實驗ある人のかたるところなり。

況んや容貌は天與なり。天與につきて、今更兎や角と思ふは愚なりといふべし。見よ。黃色人種は、などか白色人種となるを得ん。白色人種も、亦、黃色人種とならんと願ふとも能はざるべし。これと同じく、天性なる顏色、及び、身の長短、肉の肥瘠、體の形狀などは變ずべきものもあらず。然るに、これを變ぜんとつとむる女子は、淺ましきわざにこそ。まことや、人類は、精神的のものなれば、無生物なる海棠芙蓉等と美を比準すべきにあらず。蓋し、骨相毛髮などの美醜のみを分離して考ふるときは、無生物と異なるなきも、人類は、精神の表出ありて、これが美醜に關係すること大なれば、この精神の表出を研究せざれば、未だ、人の美醜を悟るに足らず。幸に精神は、我が一念を以て變化するを得べければこの點より、醜婦も美人となる道なきにあらず、

養蜂業と蜂蜜に就きて

近藤隆

人は病める時に於て、憂苦を伴ひ生ずる如く、同様に健康なる時に於ては、又、愉快を伴ふものなり。人の健康とは如何なる狀態なるかと問へば、消化機能は、その當を得、又、呼吸機能にも、少しの障りなく、血行も充分に、筋肉の發育生長も宜しき時なりと答ふるを得べし。近時世間の教育家は擧つて吾人の體育に重きを置き、或は男子には戸外遊戯として漕艇、野球庭球、あるは又戸内の遊戯運動には、柔道、擊劍など勸め、女子にも、又それ〳〵の適當なる運動法を推擧するを見るなり。余輩は彼の人々の如く、女子の爲めに適當なる、戸内戸外の諸遊戯の普及を望むと同時に、一の附隨せる條件を提出するものあり。そは何ぞや、曰く凡そ運動なるもの丶主旨とするところは、人々の健康を增進するものにして、同時に、其の各の運動は何れも永續的のものたらざるべからず。換言すれば、その運動の効果をして充分ならしめんには、必ずや永き時日の經過に待たざるべからず。即ち、或種の運動を爲すことの爲めに、新に生じたる習慣は、其の運動の廢止と共に、同時に除去れ得るものにあらじ。そが一例を擧ぐれば、永く騎馬にて往復せしものが、一旦不用意に步行を試みたりとせんか。彼は、必ずや身體の或部に異狀を感じ、數日臥床の不幸に陷るべし。されど平常用意せる人ありて、一日は騎馬にて、一日はその足によりて、日々の勤めを果せりとせば、其の憂ひは、蓋し除かるべし。故に曰く、斯の如く

あれば、運動の種類の撰擇は、甚だ大切なるものなりと。余は女子が、其の年尚若き時代に於ては、色々の游戲により、其の身と心とを丈夫になし得れども、一と度び人の家に嫁してより、その甚だ不健康なる心と身との持主に變らずとも、少くも愉快の甚だ僅かの分量の所有主となり終るをかなしむものなり。そは一には、日本に於ける今日迄の習俗によれば、女子は、多く家にのみありて、戸外に出づること少く、依りて以て不健康なる狀態に陷れると、他には女子自身の甚だ謙遜にして、進んで快活なる心と身とを得べき途を求めざりしとに歸せざるべからず。然れども、例へ此の二者を外にするも、女子は、人の家に嫁しては、其の當座こそ、種々の途に就く事を得べけれ。子をまうけ老ゆる舅と姑を養ふと云へる境に至れば、その方法は、又もや今日迄の習俗によれば、多くは家に在るを要して、遠く遊ぶを許されざりき。

余は深く、如此き事柄に關して叙述するを要せざれども、嘗て本誌に於て、女子と園藝なる一文を草せる時に有せると同一なる考をば、斯に記し置かんとするものなり。即ち今日に於て、余輩は種種の游戲を女子に勸むるものと同じく、余自身の考を以てせる、女子に、尤も適當にして、衞生的に永續的性質を帶ぶる一種の運動法をば、世間の批評に問はんとするものなり。余が曩きに女子と園藝なる、一文に於て論ぜる如く、女子は、斯かる事には、特種の技能を有するものなり。而して今、此に掲げたる處の蜜蜂飼養の事の如き、婦人の家庭に於ける運動、及、敎育、其の他、衞生等の點に於て、如何ばかり多大なる貢献をば爲すものよ。余をして少しく蜜蜂に就て、述ぶる處あらしめよ。

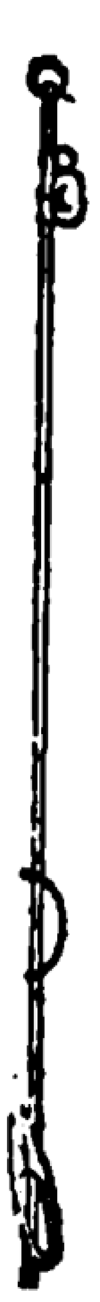
理想の嫁（二）

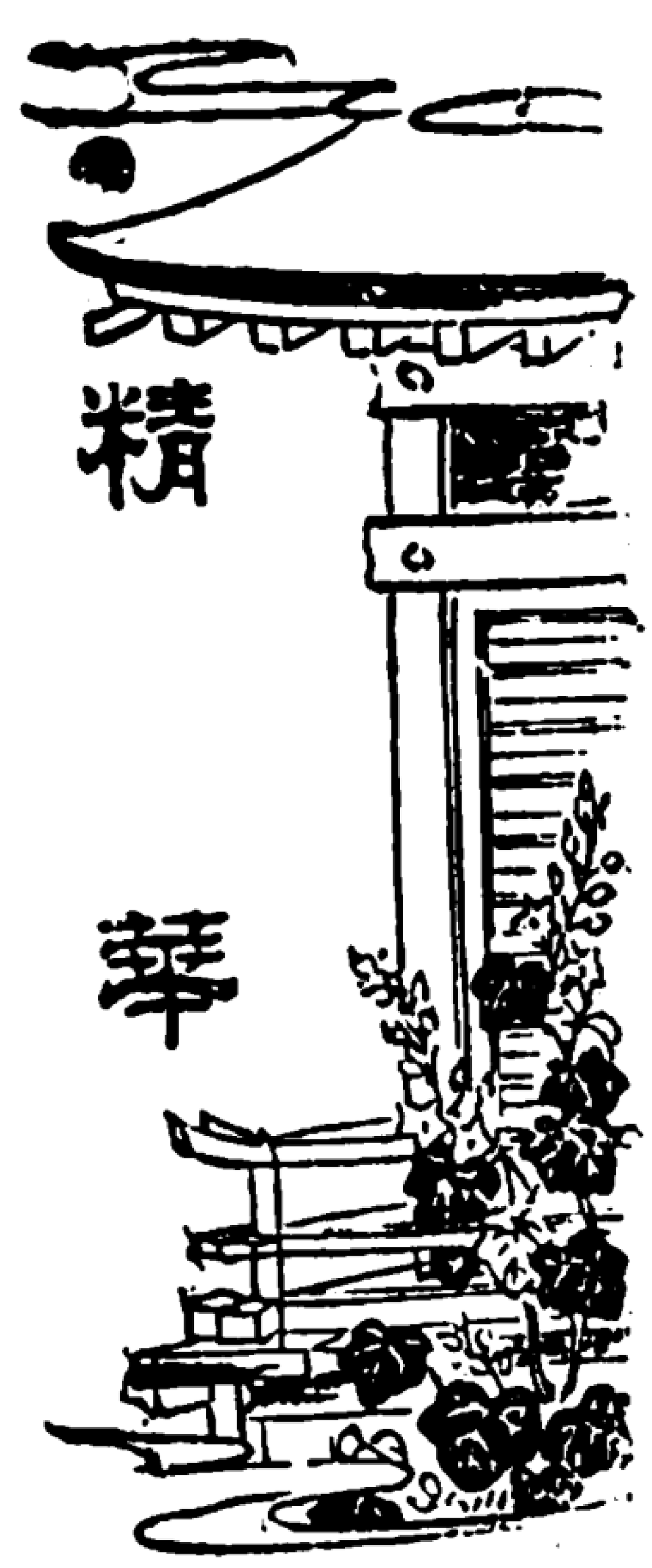
欣翁

昨夜縁者の家内が、久々で訪れて來ての話に……此の頃女鑑の誌上で承れば、此家にも近々嫁御をお迎へになるとのこと、幸ひ自分の姪が當年とつて二十歳、此家の何さんには丁度よからうと思ひます。御披露のヶ條書きには、何れも粗適當致して居りまする……との話、それは何でも耳寄りのこと、今少し委しく承らむと、其の先きを尋ねて見ると、先づかやうでござる、………先方財産と家柄と……は勿論縁合のことでもあれば、別段にいふこともないとして………其の娘の教育………はといふと、當春某高等女學校卒業、しかも餘程學科がよく出來て、在學中何時でも、その級の一番であつたと申すこと、品行もよければ、氣質もはき〳〵として、因循ならず活潑に過ぎず、英語も一通のとなら西洋人との會話にも差支なし。國文は達者に出來て、和歌もなか〳〵上手「女子の友」の懸賞に二三度も當選した位………。容貌も十人前よりは勝れた方………。その上御身の御企望な音樂が、當人大の好き、樂訓とやら、まだ綿密に讀んだとはないが、あんな假名交りの本、はなんでもないと、ツイ此の頃も申して居りました……それから健康のことは十人に勝れて丈夫といふでもないが先、あたりまへと御承知下さい。………

それはさて〳〵怜悧な御娘さまのやうに承る。さやうに承れば、その卒業なされた學校のことが、今少し委しう聞かせてもらひたい。兎角學校風といふものは、どうしても、その卒業生には隨分と深う潤み込むで居て、それがなか〳〵爭はれぬ

ものでござる……といふたら、先の話に……彼娘の上つて居つた學校といふは、先以て高等女學校では屈指のところで、敎員には、高等師範の卒業生が七人其の他名賣れの名士が五人も揃つて、おまけに英語の敎員には、西洋夫人が出勤致し、それは〳〵ゑらひ御方ばかりの顏揃であるから、校長も餘程しつかりとした方でないと務まらぬさうで、今のはツイ近頃隣縣から轉じられた方とか聞きました。何でも先生方はゑらい御方の揃ひだとまうします。ですから卒業生は皆業がなか〳〵よく出來るさうで、姪なぞも、來年は是非女子大學に入學したいと申して居る位でございますよ。………イヤモウ澤山々々、それまで承れば澤山でござる。………婆や大分話が長くなつた茶でもお入れなさい。………さても當節の女學校といふものは、まことに困つたものでござる。女學校とは、學者を養成ところででもあるかのやうに一般に考へて居る。女子敎育に多年經驗のあるといはれる人でも、何處までは日本風を維持して何處らは他國の風をも採用せねばならぬといふ女子敎育の標準がはつきりと立て居る人は甚少い。それであるから女學生といふものが、西洋風とも付かず、日本風では大に無し、全く間の子で、何とも恐れ入たのが澤山に出來るやうだ。それに官立の女學校では校長でも敎員でも、資格とか履歴とか、かやうなことばかり八ケ間しくいうて、官廳の辭令で、烏合の職員を集めたばかりであるから、學校の精神といふものは、一寸もない。………イヤ愚老が一人で圖に乘つて話して居て、皆さんお眠ないやうである。マア御茶でも………





精華

勅語要義（承前）

東久世通禧謹述

進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ、常ニ國憲ヲ重シ、國法ニ遵ヒ、一旦緩急アレバ、義勇公ニ奉シ、以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ、是ノ如キハ、獨リ朕ガ、忠良ノ臣民タルノミナラス、又、以テ、爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン。

〔廣公益開世務〕謹みて案ずるに、此の大八洲は、皇　上之を、　皇祖に享け給ひて、萬世、此の臣子を撫育せさせ給ふ樂土なり。生を、此の土に享けたる者、戮力、協心、益、之を開擴し、愈、之を富盛ならしめ、以て、優渥なる皇恩に奉答する所なかるべからず。方今、宇内を擧げて、比隣とし、國際競爭、愈、甚しきを加ふる時に際し、人々、若、一身一己の安逸を貪り、自他共進の要を忘れなば、祖先の遺業を繼承して、本分を全うせんこと、亦、企圖すべからず。故に、益、德性を修養し、進みて、世益を開擴し、以て、此の邦基を鞏固ならしめ、萬邦對峙の間に屹立して、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る要を勉めざるべからざるなり。

〔重國憲遵國法〕國憲國法は、　陛下、　皇祖皇宗の遺訓に則らせ給ひて、この國家を統治し、臣民の安寧を圖らせ給ふ綱紀なれば、必、之を重んじ、愼みて、遵ひ守らざるべからず。若、之を忽にし、之を犯さば、啻に、國法の罪人たるのみならず、實に聖意に違ひ、御惠に背き、

不忠之より大なるは莫く、不孝、亦甚しといふべし。

〔義勇奉公〕我が國古來、金甌無缺、萬邦無比の國體を持し、皇威を海外に輝しゝは、固より、皇祖皇宗の威烈に由ると雖、亦、歷代の臣民たる我等の祖先、共に、義勇公に奉じたりしに由りてなり。今より後、若、勇を失ひ、義を忘れて、この國家をけがしなば、これ、上は、　皇祖皇宗の洪恩に背き奉り、下は、祖先を辱めて、臣子の分を失へる罪、之に過ぎたるはなからん。凡、邦國の盛衰消長は、國民元氣の振否如何に存す。元氣、若振はずば、堅甲利兵、何ぞ恃むべけん。吾等臣民たる者、豈、奮勵興起、以て、本分を全うせん事を期せざるべけんや。

〔扶翼皇運〕孝、友、和、信、恭、儉、博愛より始めて、百の德行は、皆、天壤無窮の皇運を扶翼し奉る一義、其の要旨を總括す。身を修め、家を齊へ、公益を開き、國法を遵守する等、皆、歸する所、忠愛の大義を全うするに外ならず。日常の務を疎にして、敢、不時の功績を立てんと思ふが如きは、眞に、本分を重んずる者にあらざるなり。

〔顯彰遺風〕君に仕へては忠、祖先父母に事へては孝。神州臣民の本分、爰に盡く。我等の務は、祖先の明範を繼承し、益、之を發揮して、後代に遺し、以て、祖先の本旨に協はんより大なるはなし。我等、臣民、若、祖先の遺風を顯彰せずば、明範亦、之が爲に、蔽塞して、祖先の德行を汚すこと大なり。何を以てか、後代萬世に對せん。

謹みて按ずるに、此の大八洲は、　天祖の經營になり、　皇上、之を、　皇祖に享け給ひて、

天地を長久に統治し給ひ、吾等臣民は、撫育の洪恩に沐浴して、萬世、其の生を安んずる樂土なり。此の樂土に生れ、瑞穗の稻を食ひ眞名井の水を飮みて天下の至樂を享有する者は、戮力協心して、益、之を開擴し、愈、之を富盛ならしめ、以て、廣大無限なる天恩皇澤に奉答せずばあるべからず。古昔は、四境遼遠にして、外寇の患、甚、繁からざりしかども、汽機の功、日に進み、縮地の術、月に普きに至りてより、宇内を擧げて、比隣とし、國際競爭、愈、甚しきを加ふる時期とはなれり。此の間に立ちて、國威を發揚し、國家の安寧を鞏固にせんと欲せば臣民の協心戮力更に、前日に倍蓰せざるべからざるなり。若、人々、一身の安逸を貪り、一己の利慾に耽り、自他共進の要を忘るゝことあらば、國家擁護の道立たず、祖先の遺志を紹述し、遺業を恢弘して、本分を全うすること、亦、企圖すべからざるなり。故に、益、其の德性を修成涵養し、進みて、此の同胞兄弟と、相提携進步して、自他の幸福を增進し、世益を開擴し、以て、邦家の基礎を鞏固ならしめ、萬邦對峙の間に屹立して、國威を失墜すること無かるべきは勿論、狹き國は廣く、峻しき國は平けく、遠き國は、八十綱打かけて、引き寄する事の如く、洲の八十洲おつる事なく、我が皇の德を光被せしめ、其の化に歸せしめて、以て、天壤無窮の皇運を扶翼し奉らんことを期せざるべからず。

賣花婦そめ

田山とり子

まだ東京を江戸といひし頃、小石川傳通院の前なる、白壁町に、孫七といふ大工ありけり。いざ是からといふべき、はたらきざかりの年頃にありて、いかなる病氣ありけむ、耳とほくなり、手足の活動さへ不自由になりければ、宵越の金錢は遣はずといふことを、いたういみじきことに思ひたる職人の、貯蓄などの有らむやうもなく、妻の手ひとつして、辛くも、日々の活計をたつことゝなりぬ、妻の名をそめといへり。心ざま眞實に正しく、よろづのことに行屆きて、擧止動作も、いとしとやかにて、職人の妻には珍しきものにいひはやされたりき。晝は、花の種々を此街彼町に賣歩きて、皈れば、裁縫洗濯の賃仕事をつとめけり。斯ばかりの果敢なき職業なれど、程にすぎたる利を貪らず、時を違ふるなどのこともなかりければ、人々爭うて賴聞え、買求めけり。孫七が母は、青梅といへる地に住みけり。いさゝかの物ながら、買求め送りては、時節のうかゞひを怠らざりきといふ。家には、病める夫と、つねといひて七八歳なる女と、きよといへる六歳ばかりなる、是は他の女を養取れるとが居りけり。皆汚しからぬ衣服を着せて職業の外の僅なる時間とはいへ、介抱愛育また粗忽ならざりき。一年、程とほからぬ富坂町に、乳なくていたく困ずる人のありと聞き、其の子を預り、女の乳房をわかちて育てけるが、やや、懷をはなるゝほどになりけれど、其の家甚貧しくて、到底養ひがたき樣なりければ、即ち、之をも養ひて、眞實の子のごとく愛育てけり。斯く費用れはき中にても、施與を好み、家に立寄れ

るは勿論、路にて行遇ひたる乞食にも、必ず、若干の金錢をば惠まずといふことなかりき。果敢なき職業にても、誠實に熱心に勤みだにすれば、かかる餘裕も出來るものなりけり。なほ、夫の病氣には、上野國草津の温泉よかるべしときゝて、路用其の他の費をもいとなみいでゝ、短からぬ月日を其地にすごさせぬ。斯の奇特なる行狀の、いかで、何時まで世にうづもれはつべき。寛政八年といふに、時の町奉行小田切土佐守これを知り、金穀を贈りて、厚く其の特行を賞せりとぞ。これより貞節の賣花婦の名、いよ〳〵、世に傳はりて、其の花のにほひをだに求めて、わが女わが婦のまもりにせむと、きそひて買求めし程に、其の生計もます〳〵豐に、一家いと睦しく樂しく日をおくることを得たりきといふ。



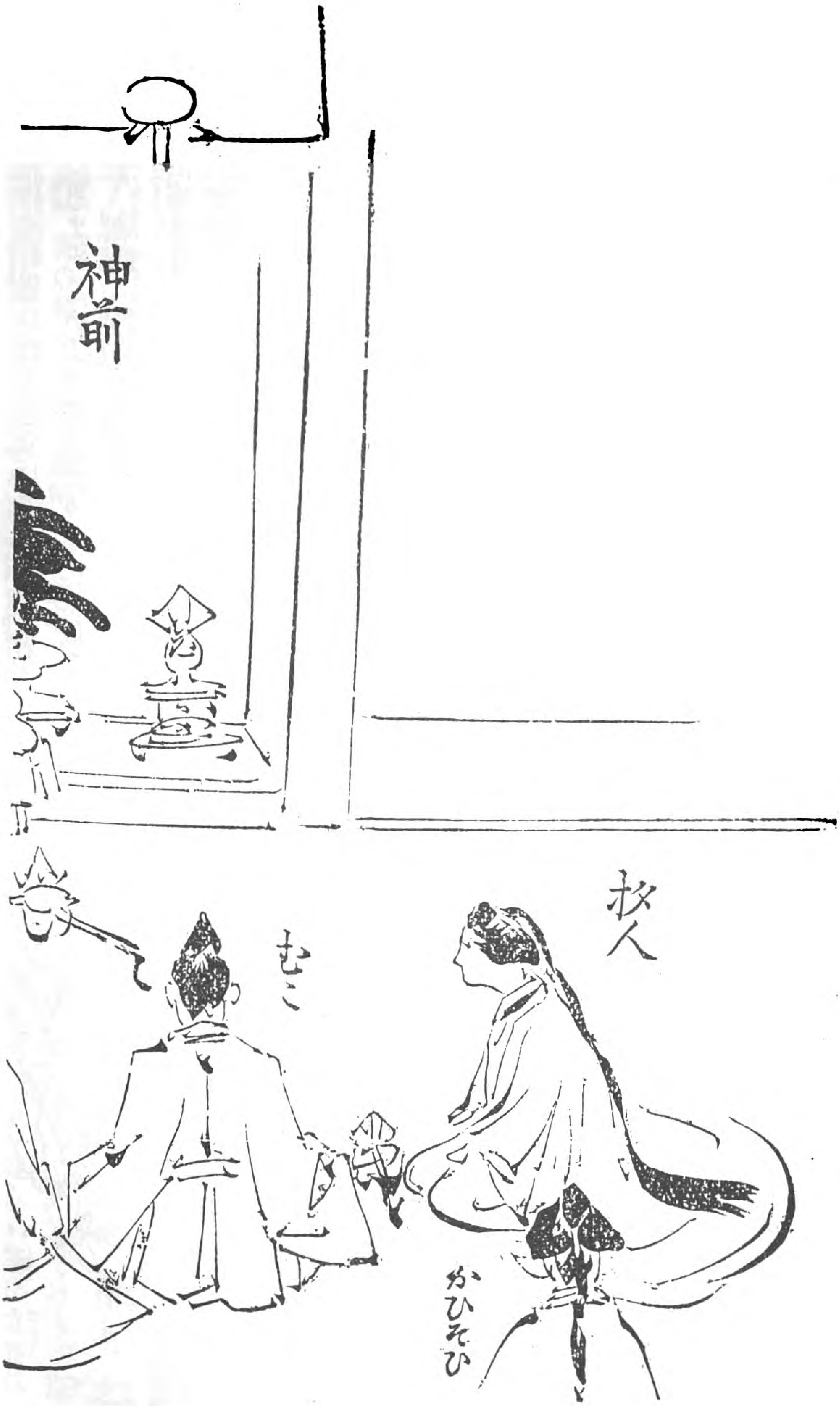
家政

婚禮式（承前）

有住常子

神前拜禮並に神酒いたゞき樣の事

先、待女房御先立にて、聟君、御嫁女相並び老女御とも致、御祝の間へ出、座、待女房、御さしづにて、聟君、御嫁女神前へ向ひ並び座す。其の時待女房、初め一同、はい禮なす、時分見斗ひ、本酌、加の者立出、神前にすゝみ、雙方御酒をとりおろし、加へうつし、又長柄へくはへて、本酌、御盃三方を聟君御嫁女の中央にすゝめ、ひかへ居る御兩人共、御盃を手にとり、御神酒一献づついたゞき、一禮なし、雙方本座に付くなり。


神前
むこ
かひぞひ


待女房
よめ
かひぞひ

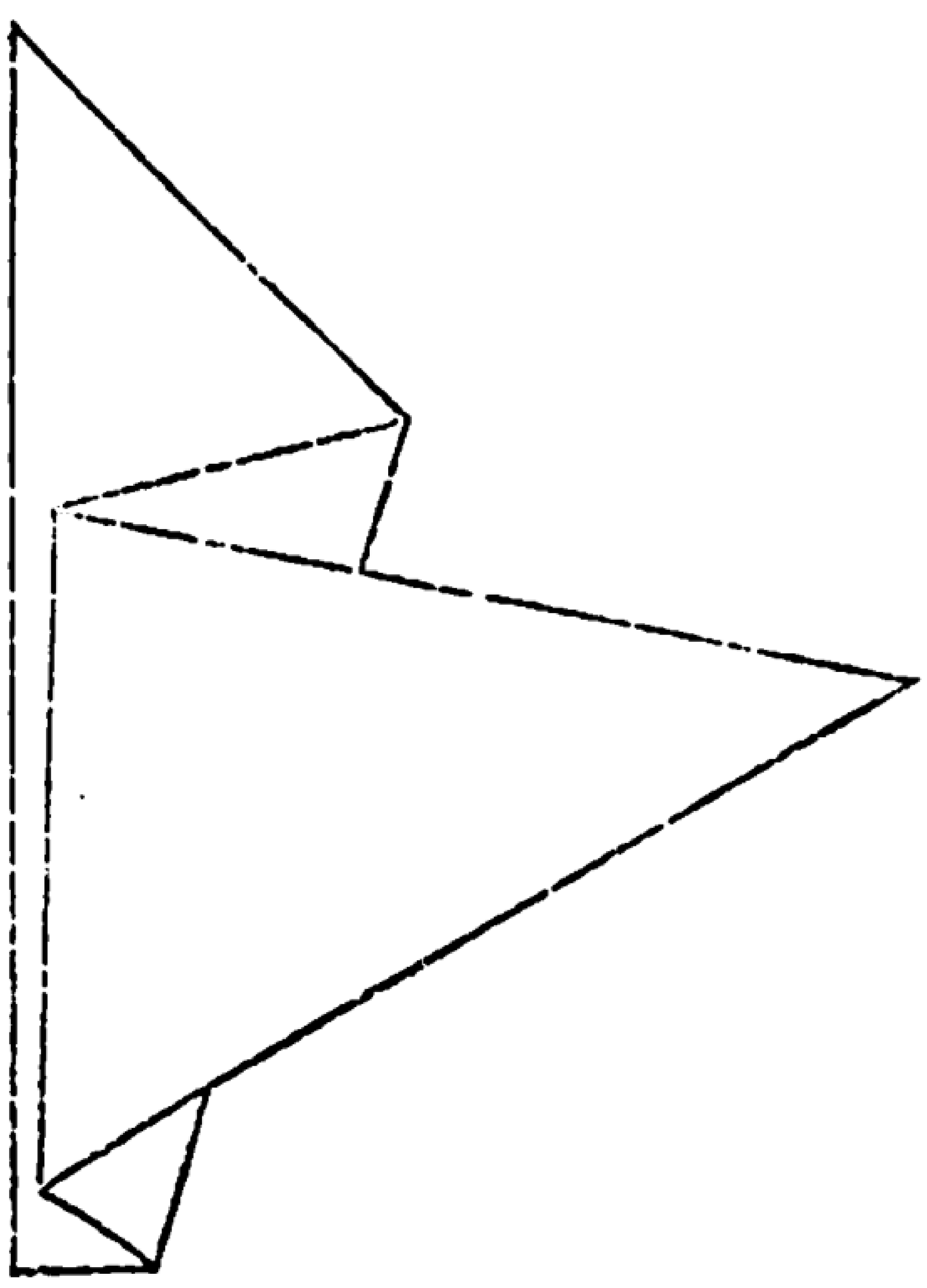
折方

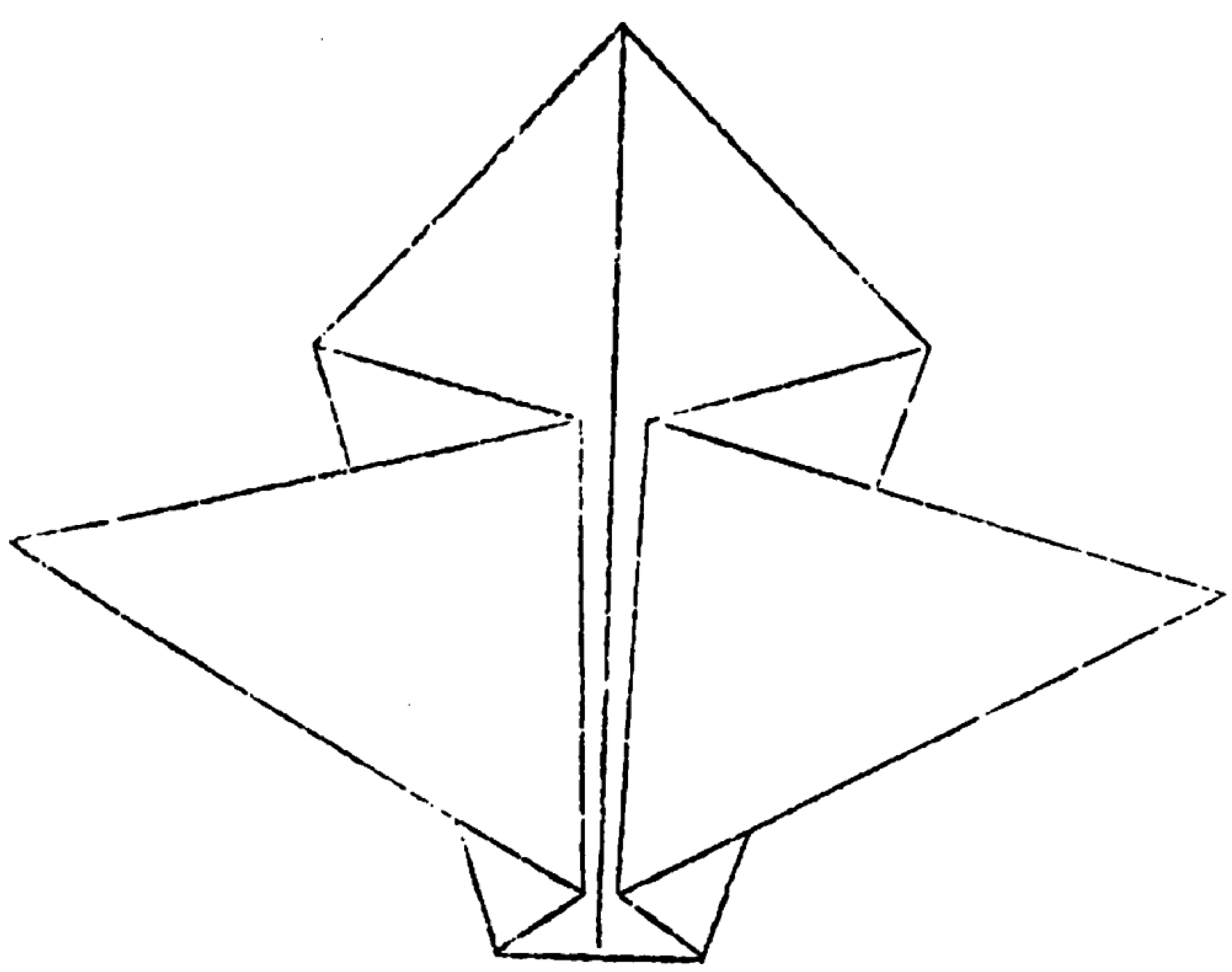
銚子雛蝶

有住くわう子

はねはうへに卷きて紅白二まい重

（たりあがり）





茶の湯

茶禮初學（承前）

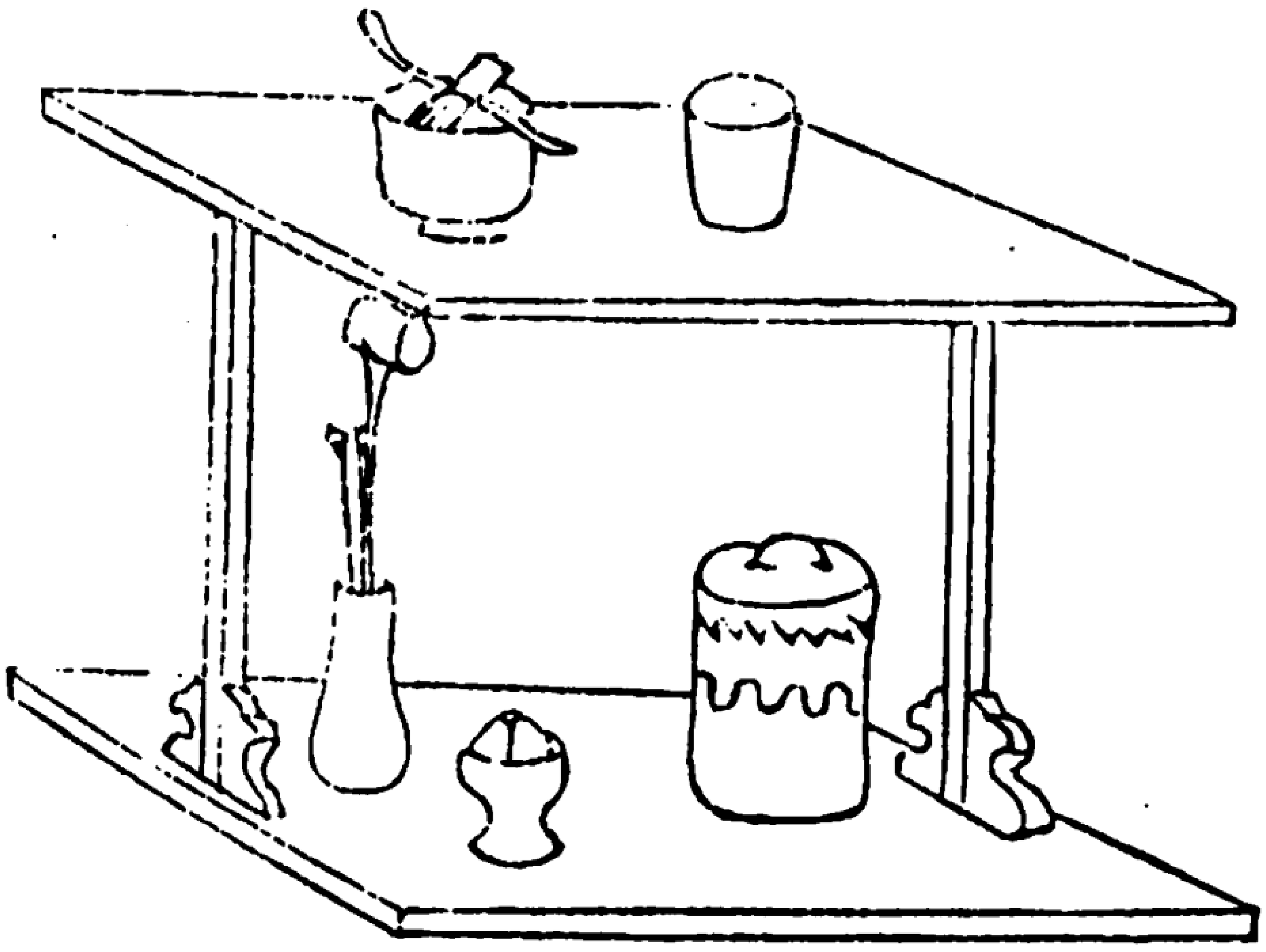
孤峰庵碌仙齋不美
關　葦雄

眞臺子及臺子

不美曰、眞臺子の必要は、前回の發兌に掲げたれども、尙訓練の大綱を精密にせざれば、是を實際に施行するに至りて不審の廉なきにしもあらざるべし。因て、爐の季節薄茶手前の手續を記載して、讀者諸孃の參觀に供せんとす。先前回に陳述したる如く、臺子に向ひ、火箸を拔取、如例、左手にて、地板の端の方へ置付け、右の手にて、蓋置を取、左の手の掌中に受持、爐の方に向ふべし。(但し、臺子居前臺目故、爐邊の外隅を目當にして、則、是の隅に身躰の眞中に見透すべし) 持回りたる蓋置を右手にて、爐緣の右の方、隅縫疊緣より向疊の目、三つ離れて置くべし。爐緣の方も、疊目三つ離れ候樣見計ふべし。次に爰にて、心氣を臍殿に治め、氣力を高尙にし能悟道して、所謂禪宗の、座禪主義を取、何程尊貴の御前にても、英雄豪傑の前、或は、他流名人上手の前にても、恐愕賤劣の心等、毫末も不出、是を手近く、方今の令婦人方に解し易きは、學校の大試驗と見做して可ならん。其の故は、日頃折角に勉勵して、日月を費し、幾分の資本を費し、十分に仕籠をなし、今度の大試驗に臨み、忽ち卑屈心を惹起し、校長敎師の列座に畏縮し、精神顚倒し、容儀をみ

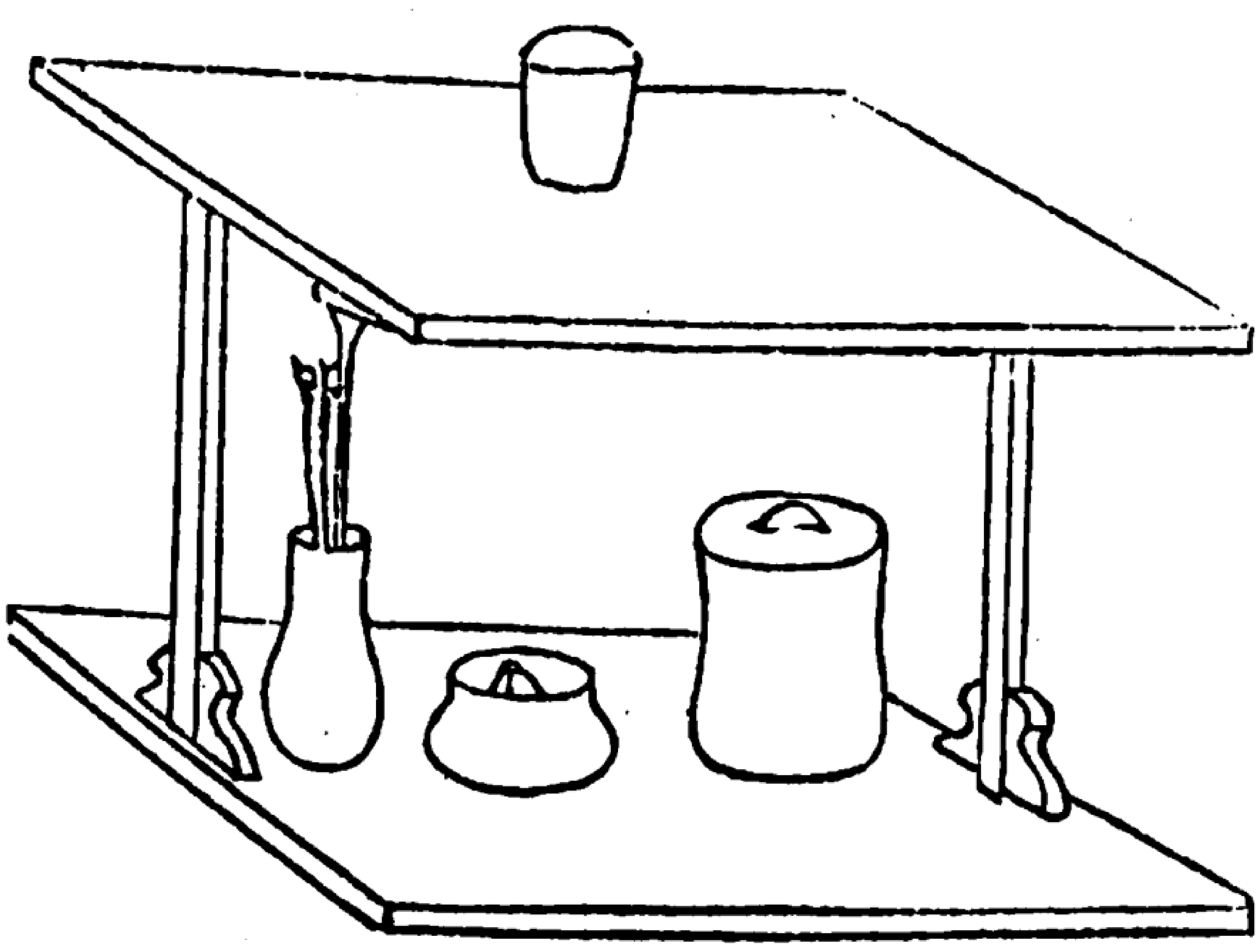
だす時は、質問に返答書取も作文も成得べからざるは眼前ならん。意佐鎌倉と云時に至りて、人は男子にもせよ女子にもせよ、世に言ふ諸物の鉢の木然たる塲合なくんばあるべからず。茶の點前位、何程の事の有べきと云素

及臺爐の時
天井茶入
茶椀
地板水指
柄杓建　筋杓
蓋置　火筋



人の評もあるべけれど、現場に臨む時は、不思掛ぬものにて、多少顔ふり替り、或は、其の塲所替りたる時は、小學生は、平素より餘程却歩するものあり。都て物は、皮相のみに止まらず、骨髓を習ふべきなり。此の十有幾行

同
天井茶入
地板水指
柄杓建　柄杓
火箸
建水内に蓋置



は、不知〳〵岐枝の道路に入たる樣なれども不美の精神は、御八釜敷も、飽迄、此の事を尊耳に入置き茶の點前計は、座したらば、大山嶽岳の崩れ來るも不動、縱令山崩、家屋潰るも、骨肉は如何になるとも神魂は、尙存すと言ふ。氣症を含蓄せざるべからず。又、劍道に於ても、竹刀を以て立合、早々相手の面籠手を打ち切ると斗思ひたらば、先に其の透間を見出されて、自分却て、忽打れて失敗を取るべし。精神を練磨するにあり。婦人長刀、或は鎖の手術も又然らん。

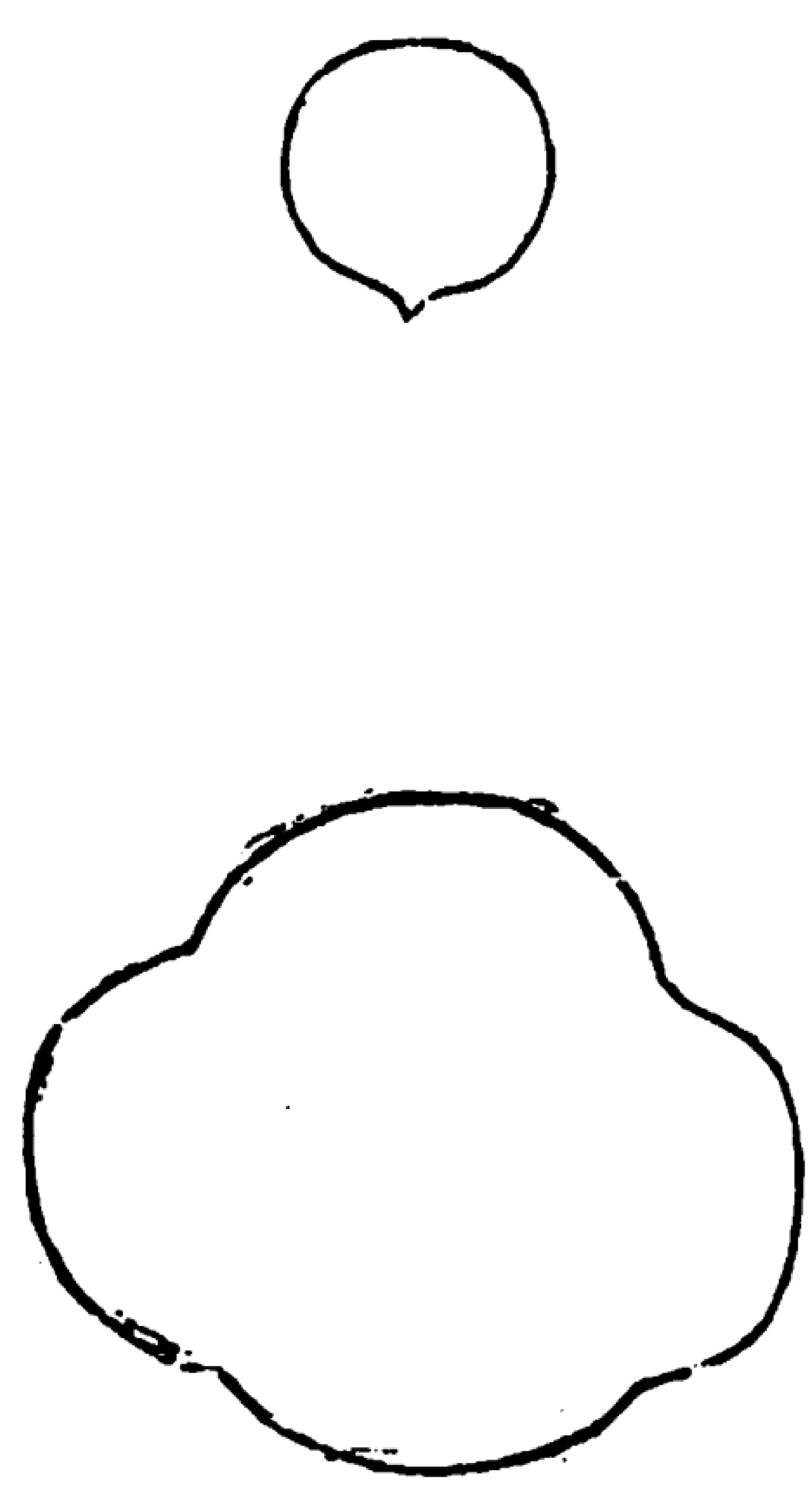


たちぬひ

匂ひ袋

ふくらすゞめ

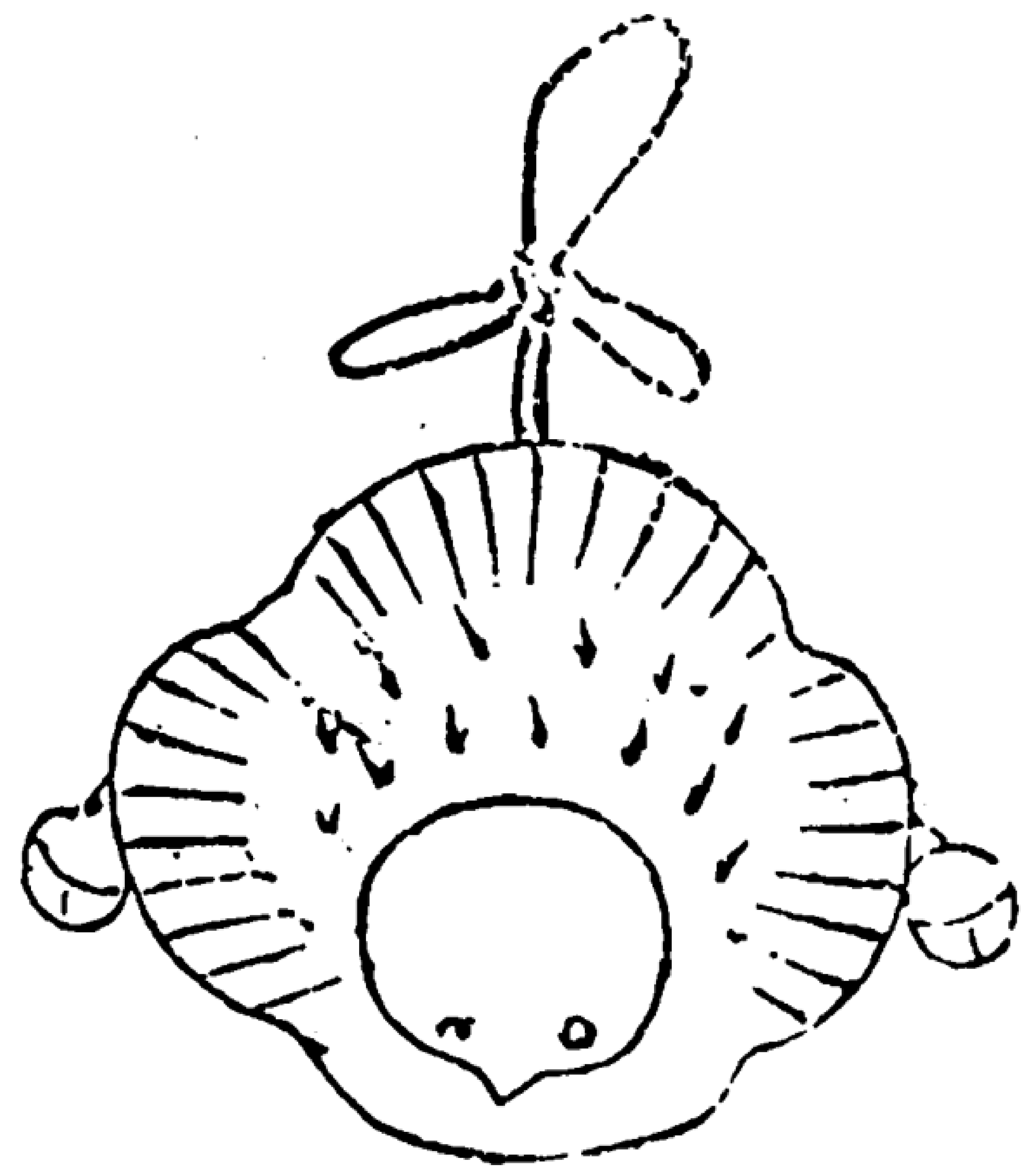
西山たい子



右の圖の如き形に厚紙をきり、匂ひ綿を入れ、切れをきせ、目、くちばし、及び羽、尾等を書き、どうの上に、くびをはりつけ、尾の方に例の紐をはさみつけおきて、裏は、表のどうより少し小さめ

に同じ形に切り、綿を入れ、切をはりて、表を例の如くはり合すべし。首のいたゞき、羽、尾等を赤くぬるもよろし。また、羽の兩方に、小さきすずをさぐるもよろし。

(その圖)



割烹と禮節(承前)

第二編割烹教授

(第一節近來の教師と教授法)

井上善兵衛老人

神田一ッ橋の女子職業學校の割烹教師として、新聞に雜誌に、其の名を知らるゝに到れり、新聞雜誌に曰く、

料理の教授　神田一ッ橋なる女子職業學校割烹教師築地新喜樂の料理職人井上善兵衛翁は、維新前某諸侯の庖丁家にて其道には最名を知られたる人なるが今回築地柳原町間野知十方へ毎金曜日に出張して有志の人々に教授せらるゝ由

など記載されたる如く、實に職業學校の教師として、新喜樂貸食店の職人として、其が名を知られたるなり。然れども某諸侯の庖丁家にて、其の道にと云はれたるは過稱にして當らざるなり。さりながら某侯の料理人なる事は事實なり。扨此人の教授法は、昔時の正しきを、其の儘に取

れるには非ず、只少し昔時の餘風を存じたる方も有れど、其の眞道の順序に於ては、未だ得ざる所あれば、此の人を以て、昔時の餘風を存じたる料理人として紹介する事を得ざるなり。

斯くは有れど、其の料理人以外に於て、單に割烹の敎師として、對表せんには、赤堀老人の上に出でらる事は明かに知られたるなり。其の實地につきての敎授法は、今暫く云はざるべし。

先に赤堀老人の條に云ひたる如く、此の人を以て亦、余が割烹敎場に對表すべき誤解者有るに及ばんか、又、此の人を以て、赤堀老人の如く、一方の敎師と誤認する者有らんかとは、其の人々敎授を受けたる生徒たちに付て又、其の新聞雜誌の讀者に付て、余が先づ疑問せんと欲する所たり。

余は爰に於て、昔時の井上氏を紹介せんと欲す。

讀者乞ふ左の一行を記憶せられん事を。

嘉永五年　森越中守内　井上虎次郎

これ、鈴木甚兵衛、即ち四條流の庖丁家として、諸侯料理人の敎師として、余が家と並立し來れりし鈴木家の神文帳の一行を抄出せるなり。

されば井上老人も、又、余が母家の門人にして其の階級上、亦余が家翁の割烹敎場生徒の一人たる事は云ふまでもなく實に以上あげ來れる事條に由て某諸侯の庖丁家の名稱を削て、某の侯の料理人なりと改定し、其の位置を上て赤堀老人の上に置き、特に割烹敎場生徒の名稱の本に立て、割烹敎授の勞を眞正に取らしめんと欲する事を、余は、其の敎授を命じたる人に向ひ、其の人を推擧する人に向ひ、殊に井上氏に向つて云ふ事を憚らざるなり。



國文學講義

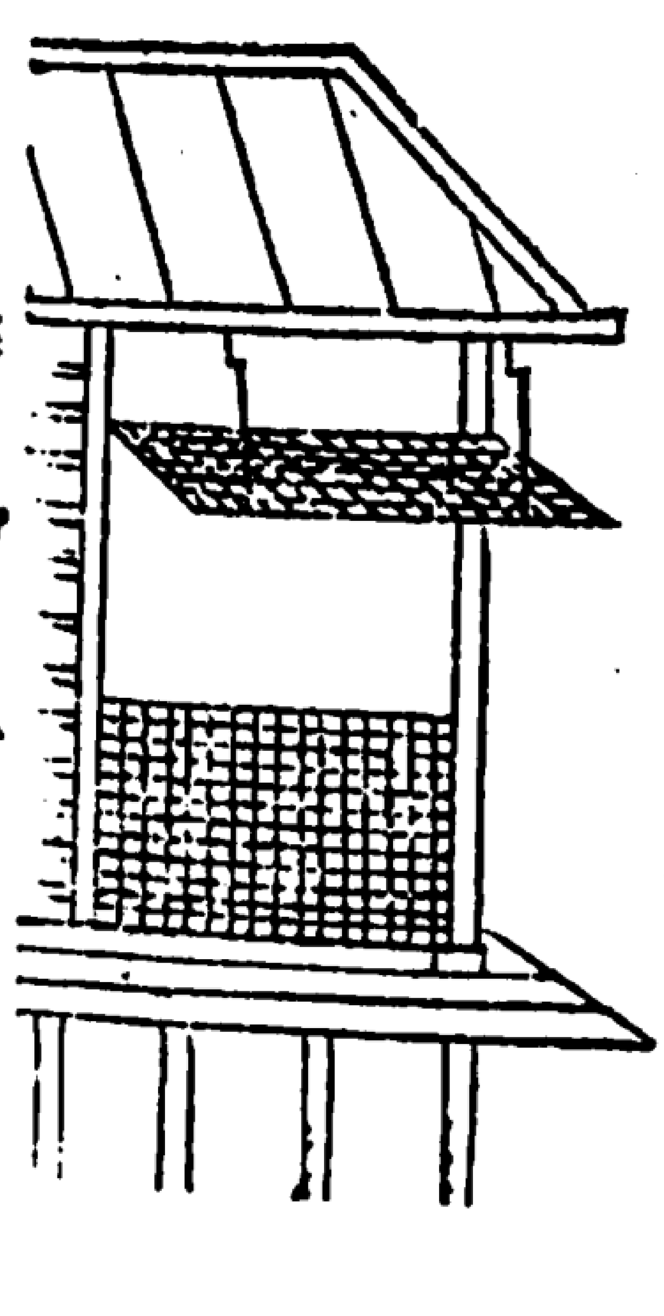
井上頼文

紫式部日記（三）

まだ、夜ぶかきほどの月さしくもり、木のした、をぐらきに、「御かうしまゐりなばや」、「女官は、いまださふらはじ」、「藏人まゐれ」、など、いひしろふほどに、後夜のかね、うちおどろかし、五だんの御ずほう、時はじめつ。我も〳〵と、うちあげたる伴そうの聲々、とほく、ちかく、きゝわたされたるほど、おどろ〳〵しくたふとし。

○釋義

○御かうし　御格子なり。格子は、和名抄に、篠子と出し、又、笿に作る、俗に、格子の二字を用う、竹障の名なりと、見えたり。もとは、竹にて作りしなるべし。さて、こゝは、今のごとく四角なる木を、碁盤の目の如くに組み、墨にて塗りたる戸にて、上に一枚、下に一枚、掛鐵にてかけ置き、開くときは、上なるは、外の方へ釣上げ、下ばかりを、かけおくなり。母屋と廂と、二重に格子あれば、母屋の格子は、内へつくり、廂の方のは、外の方へ釣りて、かけがねをかけおくなり。左の圖を見て、その概様を知るべし。



○女官　御格子を上げ下しなどする事を取扱ふ女房たちをいふ。

○藏人　こゝは、　女藏人のことなり。

○後夜のかね　後夜を告ぐる鐘なり。後夜とは初夜に對する名にて、夜半より、朝までをいへり。今、前後の文に依て考れば、こゝは、子の刻を、中夜とし、寅の刻を、後夜といへるなるべし。寅の刻は、今の午前四時より、五時までのほどなれば、御格子まゐりなばや云々、と、あるに、かなへるこゝちす。

舊説に、後夜の鐘は、亥の時を報ずる鐘なり、と、あれど、亥の時は、今の午後十時より、十二時までの間なれば、まだ、夜ぶかきほどの月、さしくもり云々、と、あるにかなはず。

○五だんの御ずほう　五壇は、不動、降三世、軍荼利、大威德、金剛夜叉等の、五壇を設けて、御産の障碍をなす、物のけ、即ち、惡魔を降伏せんとの、御修法なり。

當時は、御産のみに限らず、すべての病氣變災等も、皆、物のけの所業によりて、起るものと、かたく信じたれば、事あるごとに、種々の御修法を行はれたりき。

不動、軍荼利など祈りて、惡魔を降伏せしむることは、いと、さかりに行はれしなり。かの、舟辨慶の謠に

立ちさわぎつゝ、舟子ども、ゑいや／＼と、
いうしほに、つれて、舟をぞ、いだしける。
あらふしぎや、風がかはつて候ふ。
あの、むこ山おろし、ゆつりはが嶽より吹きおろす嵐に、此の御舟の、陸地に着くべき樣ぞなき。
皆々心中に、御祈念候へ（中略）

あら、ふしぎや、海上を見れば、西國にて亡びし、平家の公達、おの〳〵、うかび出でたるぞや。

か丶る時節をうかゞひて、恨をなすもことわりなり(中略)

そも〳〵、これは、桓武天皇、九代の後胤、平の友盛幽靈なり。

あら、珍らしや、

いかに、義經、思ひもよらぬ、うらなみの、聲を、しるべに出でふねの、出でふねの、

友盛が沈みし、その有樣に、

また、義經をも、海にしづめんと、いそ波に、うかべる長刀取りなはし、ともゑ、波の文、あたりを拂ひ、うしほをけたて、惡風を吹きかけ、

まなこも、くらみ、心も、みだれて、前後を、はうずるばかりなり。

その時、義經、すこしも、さわがす〳〵打物ぬきもち、うつ丶の人に、向ふがごとく、詞をかはし、た丶かひ給へば、

辨慶、おしへだて、

うち物わざにて、かなふまじと、數珠さら〳〵と、おしもんで、

東方　降三世　南方　軍陀利利叉

西方　大威德　北方　金剛夜叉明王

中央　大聖不動明王の

さつくに懸けて、祈り、いのられ、惡靈次第に、遠去れば」(下略)

なぞあるを思ひあはすべし。

○伴そう　僧正、僧都などの、伴ひ來りたる僧をいふ。

○おどろ〳〵しく　おどろくべくある事、俗に
おろしく、または、コワラシイ、などいふにお
なじ。

○譯　解

明方にはちかけれど、まだ、夜の深さはどの月かげ、うち曇り、木の下かげ薄暗き、時分なるに、

女房ども、
御格子を、上げたきものなり。
女官は、いまだ、出仕して居るまじ。
女藏人、はやく、御格子を、上げに來れ
など、口々に、いひあふ程に、後夜の刻限を告ぐる鐘の音、ひゞきわたりて、諸人の耳を、うちおどろかし、五壇の御修法、行ふべき時きたりて、行ひ初めつ。

不動、軍茶利夜叉など、祈るとて、我も我も、と、經文を讀みのげたる、大勢の、伴僧の聲々が、或は、遠くに聞え、或は、近くに聞えたるが、恐ろしく思はるゝ程、殊勝に、尊し。

漢文學講義

佐々木天游

雜説一　中井履軒

人而能充二其性一者鮮矣。物而不レ率二其性一者。未二之有一也。今人之不肖。訢レ之爲二禽獸一。禽獸何辜。有二不レ捉レ鼠之猫一邪。有二不レ執レ爵之鶴一邪。有二不レ噆レ膚之蚊一邪。有二不レ攫レ腐之鳶一邪。有下不二春北而秋南一之鴻雁上邪。有下不二夏出而冬蟄一之蛇虬上邪。夫人有二仁義之性一。而能履二仁義之行一者。天下幾人。人亦可三以愧二於禽獸一。

人にして、能く其性を充すものは鮮し。物にし

て其の性に率はざるものは、未だ之あらざるなり。今人の不肖なる、之を訴りて禽獸となす。禽獸何の辜かある。鼠を捉へざるの猫あるか。爵を執へざるの鶻あるか。膚を嚙ざるの蚊あるか。腐を攫ざるの鳶あるか。春北して秋南せざるの鴻雁あるか。夏出で冬蟄せざるの蛇蚯あるか。夫人仁義の性あり。而て能仁義の行を履もの、天下幾人ぞ。人亦以て禽獸に愧づべし。

雜說デ、何の說と題を定めて作らず、唯思附たるまゝに、筆を下して、書くのでありますから雜說と申します。說は前々より申上ました通り、解說說明の義で。文体諸式中の一でありあります。偖人間にして、能見事に、其の自分の本性を充し擴充するものは、誠に鮮少なるものであります。一体人は、ダレデモ、皆自然に、仁義の天性を備へ持て居るものでありますけれども、其の仁義の性を、十分に磨き充たして自分が受得て居ります所の本分を盡し、滿足の人となるものは、容易にないもので、能く其の性を充し、盡すものは、少う御坐ります。所が物の動物の方ながめてみますと人とは違うて、皆各々其の性を充し、其の性に率（率は順なり）はぬものは未だマアダ、之あらざるなりで、左樣なものは、曾てないので御坐りますのヂヤ。動物は鳥にせよ、獸にせよ、皆己が受得ましたる所の性に率ひ充しまして、其の本分を盡しますのヂヤ。ツーシテみますと。人は、其の性を充すことが出來ぬで、動物は、皆、其の性を盡すのでありますから、却て人よりも動物の方がエライと申さなければならぬ樣な始末であります。所が今（今の字は、起手助語辭にて、近事を論じます時に、多くは、此の字を用ふるのでありま

す。)人の不肖にして、賢からぬものあれば、(肖は似なり。にたることなり。不肖は、賢者に似ぬと謂ふ義にて、愚なることを謂ふ)其の人のことを誹り悪口して、禽獸の畜生同然となして、わるく申しますが。禽獸こそ迷惑である。禽獸何の辜かあるで、禽獸各〻其の本分の性を盡して居るのに、どういふ罪尤がありて、其の性を充し盡すことの出來ぬ愚かなものに比較さるゝのであらうか、誠に氣毒な話である、こゝろみに禽獸にして其の性に率はぬ者があるかと尋ねてみますと、皆、其の性に率ふもの計りで、却て人の樣に不肖にして、其の性を充す能はざるものはないのである。猫の性に率はずして、鼠を捉へつかまへぬ猫があるであらうか。猫にして、猫の性に率んで、鼠をとらぬ猫は御坐りますまい。(耶は疑の辭にして、翠乎の字と相類して居ります。なれど、乎字に較べてみますと、意味が悠長でありまして、少しく婉轉詰問するの趣味を帶びて居る字であります、鼠を捉へぬ猫があるかドウカ、鼠を捉ぬ猫はアルマイと、謂ふ樣な心持と知るべし。)又、雀を(爵は雀のことなり。孟子曰、爲レ叢敺レ爵者鸇也鸇は鷹の一種屬なり。されど、單に鷹のことゝ、心得て差支なし)執り、捕へざる鸇があるであらうか、鷹の性に率はずして、雀を執らぬと謂ふやうな不肖な鷹はあるまい。又虫にしても同じことで、人の肌膚を嚙みて、血を吸はざる樣な蚊があるであらうか、ソンナ不肖な蚊はあるまい。又、腐の腐れたる鼠だとか、魚とか。何とか、腐れたる所のものを爪の先で、摑取らざるの鳶があるであらうか、是れも亦ソンナ不肖な鳶はあるまい。又鴻雁の性に率はずして、春の社日から、北の方に歸り、秋の社日より南の方に來らぬ所の鴻雁(鴻

雁、大なるを鴻と謂ひ、小なるを雁と謂ふの區別がありますけれど、單にカリのこと丶心得て差支なし。和名鈔にも、鴻雁の二字にて、カリと讀せてあります。)が、あるであらうか。左樣な、不肖な鴻雁はあるまい。又己が性に率はずして、夏の熱き時分に地上に匍出て冬の寒き時分に、地下に蟄し、閉こもる伏らざるの、蛇とか蚯とかゞ、あるであらうか、冬却て地上に出で丶夏却て地下に藏ると謂ふ樣な、不肖な蛇蚯はありますまい。してみますと、人が一口に禽獸々々と賤めて申しますけれども、其の名々が、天より受得たる所の性を盡し、其の性に率はぬと謂ふ樣な不肖なものは禽獸の内には、却てない。さうして、自ら萬物の靈と誇りて居ります所の人間には、能く、其の性を充して、天然の性に率ふことの出來ぬ、不肖なものが澤山にありますので、夫(夫は發語の辭なり)一體、人々間には、たれでも、自然に天より受てをります所の、仁義の性と謂ふものが有まして、一人として、此の性を備へてをらぬものはありませぬ。(愛の理、心の德を仁と謂ひ、事物を裁制して、其の宜しきを得せしむるを、義と謂ふ是が人間本來の性であります。)さうして、個樣に人々皆仁義の性を備へて居りながら、能く見事に仁義道德の行を履み行うて、己が本來、天より受得ましたる所の、仁義の性を充してゆく所のものは、廣き天下の内に、幾人の何人あるであらうか廣き世の中、多き人間の内にても、能く其の性を充し盡して、仁義道德の筋道を履行うてゆく所のものは、中々鮮少うして、左樣な人は、幾人も有ませぬ。してみますと、人には、不肖にして、其性を充すことの出來ぬものが多くして、禽獸には却りて其の性に率はざる樣な、不肖なものはない

のでありますから、人間こそ却りて、禽獸に劣る樣なもので、左樣な人は亦以て、禽獸に對して愧べく、面目なき次第で、禽獸々々と。賤見むわけには、參りませぬのみならず、苟も人間の人間たるべき、本分の性を充して、仁義の道を履行ふことが出來ねば、禽獸程にも、其の本分を盡すことの出來ぬもので、却りて禽獸に合する顏もないと申さねばならぬ。されば、たれでも、皆、其の性を充し盡して、仁義の道を履行ふ所以を、考へんければなりませぬ。どうか皆樣方も、能く作者の感慨の有る所を、熟讀玩味なされまして、萬物の靈を以て、却て禽獸に若ざるの譏を招かるゝ樣なことなからんことを庶幾ます。

和畫通信講義（第壹回）

山崎彩峨

繪畫は、從來、運筆を自由ならしむるが爲め、多く、四君子より練習せしめしが當今、各學校にては、すべて、洋畫の規則に據り、直線曲線より敎授することゝなれり。これもとよりわろからず。然れども、直線曲線よりなれる器物より、漸々、練習して花果草木禽獸蟲魚を畵くに至るまでには、幾多の歲月を經過せざるを得す。世間繪畫に志したるものにして、中途にして、そを廢するに至るものゝ多きは、これがためなり。試みに思へ、われ〳〵が、日常、愛觀する花果草木禽獸蟲魚を隨意に、捕獲採摘して、自由に、これを寫生するは、いかにたのしみなるか。人の繪畫を學ばむとするは、多くは、そのたのしみをなさむとす

るに外ならず。さては、はじめより、さる事を教へて、飽かしめず、知らず知らず、その薀奥に達せしむるは、また、よき方法ならずや。わらは不才なれど、いさゝか、繪畫を學びたるものなり。こゝに、舊習に從ひ、花果草木よりはじめて、時時、寫生を掲載して、この希望を有する人々の速成の便に供せむとす。

顔料

普通の淡彩色に用ゐる顔料は、藍、岱赭、雌黄、猩艶紙、朱粉、胡粉、膠等なり。

使用法

一藍　先づ、膠を水にてときおき、後、藍を溶くなり。

一岱赭　溶法、藍に同し。

一雌黄　相應の粘力を有するものなれば、直ちに、水にて、用ゐるなり。

一猩艶紙　先づ、器皿に湯を入れ、日本酒、少許を投じ、後、猩艶紙を浸して絞り取り、湯煎にて乾し置き、(よく、振りうごかして、焦げ附かざる様に乾しどろ〳〵になりたるとき、おろして、蓋をなし、紙、又は、布にて、包み置きてほし上ぐるなり。)後、水にて、用ゐるなり。

一朱粉　膠にてとき、猩艶紙、少許を和したる方、色、美麗なり。

一胡粉　さらしたるにても、猶、使用前一週間程、水に浸し、折々、水をかへ置き、(斯くすれば、その粉、緻密になりて、使用上うるはし。)膠にて、用ゐるなり。

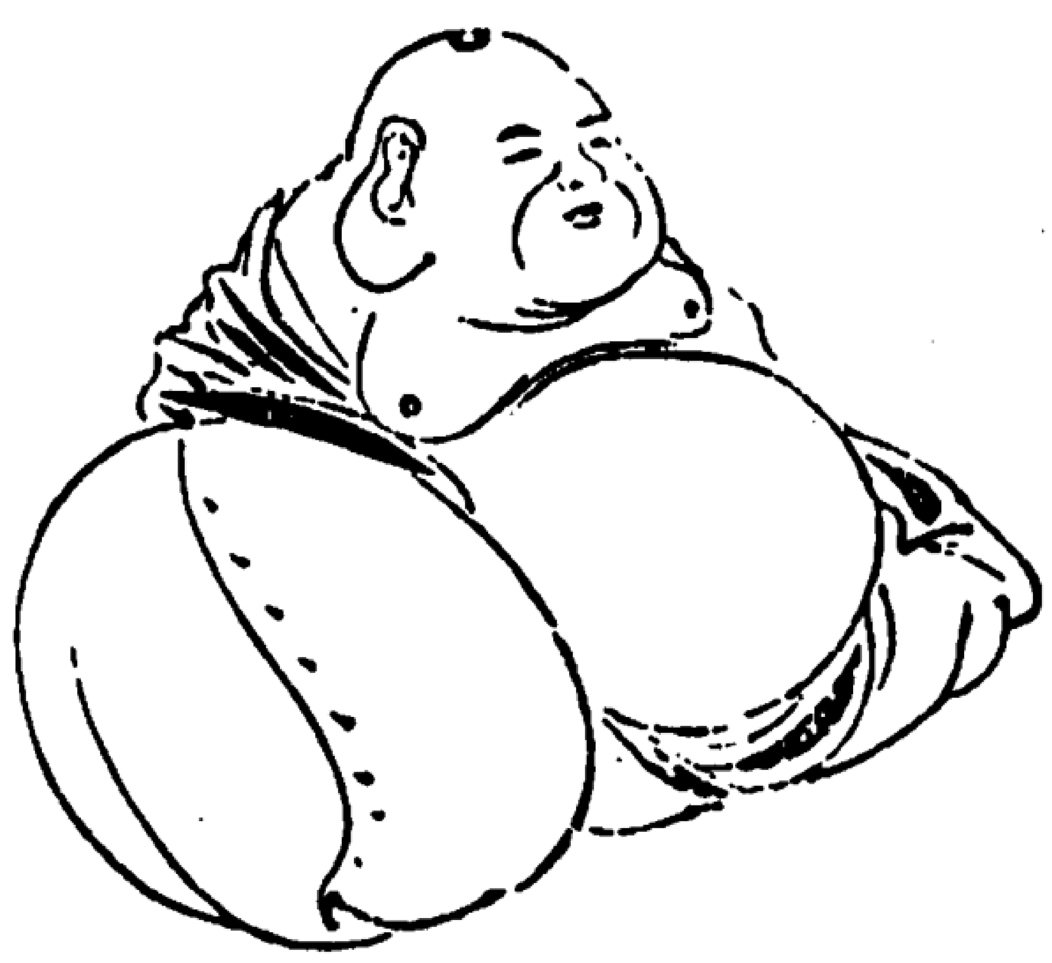
花

花は、淡き墨（通常は、墨を水にて淡くするあれども、白紙、畫仙紙の如きは、不馴の人は、筆に含ましむる水氣の加減を會得せざるより、墨の、意外に、浸染するに苦しむものあり。ある一法にては、膠に、墨を和し、淡墨となして、常用するなり。この淡墨あれば、如何なる初歩の人にても、浸染に苦むことなく、畫面、浮き上りてよろしけれども、餘りに、膠の濃きときは、皺を生じて、見惡きものあり。可成丈は、通常の淡墨を、よく加減して、用ゐる方よろしく、且つ、粗畵のことあれば、多少、浸染せしも、却りて、面白きものあり。）を筆に含め、先に、濃き墨を附けて、符號の順に描き、花臺、並に、葉の如きも、皆淡墨の先きに濃き墨を附けて畫き、乾きて後、花心、葉脈を入るゝあり。

又彩色にて、畫くときは、胡粉を筆に含め、先へ、よき加減の色に溶きおきたる猩艶脂を附けて、符號の順に畫き、後、岱赭へ、藍、雌黄、猩艶紙、およひ、墨少許を和して、花臺を畫き、それよ



り、藍と雌黄とを和して、適宜の青色を製し、（一様ならざれども、先づ、葉の表は、藍勝ちに、裏は、黄勝ちの青色にて書くなり。）葉、並に、枝を書き、乾きて後に、濃き藍墨（藍と墨とを和したるもの。）か、又は、墨にて、葉脈を入れ、次に、胡粉にて、花の蕋を畫き、次に、雌黄にて、胡粉を塗り、花粉の點を打つなり。）代赭にて、花蕋、並に、花粉の點を畫き、乾きて後、點の部分のみ、雌黄を塗るもよし。）



漫録

女訓綾廼雛形（承前）

揖取素彦

一家に召仕ふ者なく、父母の手をおろして、厨下のこと、何くれとなくあつかはるゝ程ならば、おのれも、其の心して立はたらき、よろづ勞はしき中にも、禮儀作法と云事を忘るまじ。唐土の郤缺の妻が、夫に晝餉を送りしに、人目に立ぬ隴畝の間にも、互ひに禮儀を失はで、まれ人をあしらふ如くなりしと。また梁鴻の妻の孟考は、鴻が皐氏の廡下に、米の賃づきしてありし時、朝暮の食を進むるにも目八分に捧げ持ちて、

さながら貴客に供する如くうちあふぎ視ることも得せざりしとぞ。かく草野のみだりがはしき中にても敬を持し、禮を守りし先賢の操行には及ぶべくもあらざらんめれど、せめて心に企望せば、おのづから行儀も人らしき成ぬべし。賤かふせ屋のいふせきに、親子兄弟まじこり居て、一ッ器に箸さしあひて、物給うべん中にも、其のよろしく和らかきをはさみ出で、老人に參らする樣の優しき志あらば、やがて愛敬の孝心にも通ずべし。

一まだいとけなき心には、學にあがるを、上もなき手がらぞと思ひほこり、兩親の樣々に心づかひして出し立らるゝを何ともおもはず、朝餉のこしらへ遲しはや時うつりぬと躁急ち、または、割子のそへ物のよしあしをつぶやくの類もあらば、是を何とかいはん。學に入るは、まづ孝悌の道を辨へんが爲ならずや。さるを、その事の爲に、父母に對ひて怨言をいだし、あるまじき振舞あらば、所謂孝經を執りて、親の面を批つにひとし、一字一文をも知らぬものば、まげて是非なしともいはゞいはるべし。一と度校門をまたぎし者に於ては、其の罪かろきに非ず、稚心にも、暑さ寒さは知らるべし。吹きすさびつる夜嵐の名殘、いと寒き曉に霜をふみ、氷を碎き、板井の淸水くみあげて、凍へたる手に、息吹きかけつゝ、薪折くべ朝のいとなみし給ふ父母の苦しさは、若き人だに堪がたかるべきを、かく老の身を勞せらるゝは、何故ぞ、せめては道のかたはしをもへ辨、人がましくもあれかしと、物學ひせさせらるゝも、全く親の慈恩ぞかし。まして薪水の業は、子弟のつとむべき本分なるに、おのれが幼くして、其の事堪がた

きにより、かくまで老たる尊者を勞し申は、なんぼう冥加のほども恐ろしく、勿體なきことにあらずや。暑さ寒さも知る程ならば、これほどの道理はわきまへつべし。あはれ朝夕の膳にむかひ、箸とる度毎に、このかたじけなさを忘るる事なく、無極の厚徳を必ず忽諸せざらんことを。總じて飯は粒々皆辛苦とて、田作るものゝ汗水となりて作り出しものなれば一粒として、そのほねをりのかゝらぬはなし。其の上にも親達手を下されたる飯粒なれば、半粒たりとも、千金の珠玉より、なほ貴とかるべし。此のことわりを心にしめて、箸のあげおろしにも、父母のめぐみを仰ぎ思ひてこそ、學に入しものゝ本意ともいふべきなれ。

主從心得草（後編下）

諏訪忠元寄贈

善事は眞似に成りともするがよしいつしか馴て誠にぞなる」眞似にせよ主人に忠義親に孝ひたものなれば本眞にぞなる」忠孝を商賣としてつとめなば末は黃金のかまどしやうでん

此等の歌に、似せ孝行に似せ忠義にも利益あるとを知るべし。是に依て和論語の通りにいたしなば、忠義孝行の人も多く出來て、世の中は大によくなるべし（諸君子如何思ひ給ふや、御了簡承りたし。）

或國の大守鷹狩に出給ひし時老母を脊負て過る者あり。大守是を見給ひて、あれは孝行者と見える。ほうびを遣すべしと仰せありければ、御近習申上るやうは、かれは平生大不孝なり。然れども大守

の孝行のものには御ほうびを給はると聞て、今日斗老母を脊負ひて孝行の眞似をして褒美をむさぼらんとするえせものなり決して御ほうびは御無用なりと申上れど、大守又名主を呼出して、問給ふに、又名主も右の通り申上たり。大守是を聞ての給ふやうは、世上に惡しき眞似する者多し、然るに彼れは、よき眞似をするものなり。是忠孝の人なりとて御ほうびをあまた給はりぬ。大守の仁德にかんじてかのえせ者の誠の孝行人となりしとなり。是いまの和論語の手段と同じことにして、よき方便なり。上たるものは、此の方便を行ひて、愚民を善に導くべし。よき事は眞似に成りともするがよし、いつしか馴て誠にぞなるに相違なし。眞似になりとも僞りになりとも、善事はいたすべし。かりにもよきことをすれば、福德を得るに相違なし、戯談にも僞りにも惡事をすれば、罪を得ることとうたがひなし。たとへば盜人の眞似をするものは、盜人なり。博奕打の眞似をする人はばくち打なり。常談にも人の物を取れば、御上意といふ聲がかゝりて、傳馬町の牢へはいる。心は善にして盜む心はなけれども、手を出して常談に取て見た斗でも牢へはいつて打首となる。うそにも僞りにも、人の物をぬすみてはたまらない。云譯は出來ぬ。何でもかでも傳馬町の打首となる。うそにも人の家に火を附ては、火あぶりとなる。心は善にして、誠に火を附る心ではなけれども、戯談に火を附て見た料りも火あぶりの罪はのがれがたし。私は火をつける心ではござりませねども戯談にちよつと火付の眞似をして見た斗なり。何卒眞平御免下さる可といふても、申譯は立がたしどうでもかうでも、火あぶり者なり。善事のまねも、又此の通りなり。常談にも人みせにも善事さへす

れば天より福徳をあたへ玉ふなり。是は、身ぶり仕方に付たる所の徳なり。是を作業如法といふ。心にかまわずに身の行ひに付た所の吉凶禍福なり。身にて善事をすれば、心の悪にかまはずと福徳が來る。身にて悪事をすれば、心の善にかまはずにわざはひ來るなり。是を作業如法といふ。作事さへ法のごとくにすれば、心の悪にかまはずに福徳がくるなり。爲すことが悪なれば、心が善なりといへども、わざはひが來る。今の盗賊火付のたとへにてよくしるべし。又米をよけいにつく者は賃銭をよけいにとる。又心に賃銭をよけいはしがれ共、身にてよけいにつかざれば賃銭は一文もとり難し。又心には細工をよくして賃銭をよけいに取る心なれども、身に其の業をせざれば、賃銭は一銭もとりがたし。心にて賃銭をとる事は出來難し。唯身になす業にて賃銭をとるなり。何ほど志がよくても、志に賃銭を出す人なし。志はともあれ、米をよく搗、細工をよくすれば、賃銭を澤山に取つて妻子けんぞくを養ふことうたがひなし。是は米搗細工人ばかりの事にあらず、一切みなかくのごとし。是を作業如法といふ。作事さへ法の如くにすれば、それにて物は成就して、世の中を安心に暮すなり。大方の人が、心さへよければよいと思うてゐる人多し。身と心とのわけをしらぬ故なり。身と心との善悪をわける事は長ければ、爰にしるしがたし。六編をまつべし。



斧のえ（七）

松竹莊主人寄贈
荒木田麗女遺稿

あるじの琴も、おきなの笛も、すべてまだみゝにもふれぬ聲どもなるを、中將めづらしう聞給ひ、いかで都のつとにいづれをもつたへにしかなど思しなるあるじのきこえしことにしたがひては、都に歸らんこともさのみいそがれたまはず、のどかに思しなして、ひるは人々もろともに、山にゆきて碁うち給ひ、めづらしき手ども習ひたまふ。夜る〳〵はあそびに心いれて、きんふみをもつたへんと思すを、人々かひ〳〵しう見奉りつゝ、をしむことなくて、おなじやうに遊びあかす。一二日とすぐれば、まらうとやう〳〵住つき給ひ、ずさどもゝおもなれまぬらせけるに、女はひとりなしをのこのかぎりなり。又はかにも人のかくれ家ありけるにや。しば〳〵つかひの來かよふさまなりおきなもよるは時々まかでゝ、ひるはつとさふらふ。たがあつかふとも見えねど君のふすましとねなどもきよげにて、御よそひもはなやかに、いろあひしさまめづらしくて、あまたくだり御衣かけにかけ並べあるじもつやゝかにさうぞきてつかふ者共も、わらはしもつかへまでなへばみたるなりなく、あさやかなるは、あやしきさまにてまとにたちぬふわざはたなはたづめにやあづけし、そめいだす色あひは、立田姫にやあづけしとうたがはる。小雨そぼふりくらして、しづかなる日、おきなも見えず、君つれ〳〵とうちながめておはすれば、あるじせうでこしつるに、おきなあやましくて、えおきあがり侍らず、今ためらひてなんときこえつ。いとさう〳〵しくて、あるじ君の御まへ

にまゐり、れいの物語こまやかなるついでに、中將さてもかくまでたのもしきかげにて、はぐゝみ給ふめるに猶心のへだてこよなくおはするにや。今までにいかなる御ことゝも名のりをだにし給はぬことゝの給へば、あるじうちわらひて、さまでこと〴〵しう聞えさせんこそ人々しけれ。世になきひがものとこそ思さめ。なぞてかつゝみかくし侍らんおこがらしきむかしがたりなれど、親なるものは、さえかしこくて宰相にもまかりなり、おほやけの御おぼえも侍りにし、おのれもいでたちもつかふまつり、博士にて桂をも折はべり、しばしは右の少將とてちかきまもりにかずまへられ、殿上にもさぶらひき。ほん性のひが〳〵しさは、げにあらためがたきものにて、波瀾のごとしとか、あさゆふにさだめなき人々のうへは、車をくだく道よりもおそろしく、さしもひゞしうさかえおご

りしを、時うしなひて、たちまちにおとろへゆき、家々もいちはやくうつりかはりて、たゞ春ごとの草のみあをく、かはらぬものは山河なるを見たまふるに、いとゞ世の中すさまじう住つくべくもなく、のがるゝ心のみいやましにてまじらひもむづかしう、ひたぶるに水草きよき所のたづねまほしく侍ればなん、いさゝかなるやまひなどことつけつゝ、つかさもとけて、此の所にまかりこもり侍る。妻子などいふめるものも、去りがたきほだしなれど、しひてかけはなれんもかたからずは思ふ給へしかど、都にすておきて、おちはふれんもびんなく侍れば、みなひきぐして、おきふし心やすくとれきて侍りし。わかきものども、しばしは物のさびしさもせんかたなげに見給へしかど、今はいとよく住つきて、をの〳〵ひと所にて侍らず。心にかなふ山々にいほりむすびてさふらふなり。そ

もをのこは心やすし、女こそ、とにかくにうきつまなるは、うべつみふかくてぞ侍れ。女のわらは唯一人にあるが中のおとりにて、ことにかなしう、かたちも、さのみかたわのつきたるにも侍らねば心のやみには、人なみ／＼に見なし侍るにつけても、京にてねんごろにけしきばみいひよる人々にしたがひ、すくせにまかせてやとおぼゆることもはべりしかど、それにつきてもあぢきなきことおほく、もゝとせの身をあやまつためしもおそろしく、蘭麝も時の間にはひなくなりゆくがうしろめたくて、よしやみ山がくれの朽木なりとも、心のどかならんことをこそとて、あまにもなして、後の世をだにうしろやすくと思ふ給ふれど、さすがにゆく末とはきくろかみを、しかすみやかにやつい侍らんことは、めにみす／＼あたらしくて、まことのすぢとは見つゝも、今にたゆたはれ侍るよ。おく山のふかき心もこの人によりてなんあさくなりぬるがはづかしうとおしのごひたり。中將そのかたにはことにかしこくおはすれば、さればよと思せど、こゝろえかはにてはあらで、わざとつれなくまぎらはして、さてその御子の殿原とのたまふしか、二人ものし侍る。太郎は京に時にかよひ侍る。此のころもかならず見給ふべきことゝてまかりにしついでに、都ちかき山々横河あたでなぞにのぼりつべう聞えはべりし程に、月のうらはかへらじとなん思ふたまふる。次郎なるは、千賀の鹽竈、坪のいしぶみのわたりおくゆかしげにて、去年の秋あからさまにいでたちて、今にまうでこす、雁がねにつけたる音信もなく、たよりある風だに頼みがたき松島の釣舟なれど、かたみに世をかりそめにいづこかつひのと思ひなし侍れば、いかになど心にかくることも侍らず、かへす

がへす女こそ浅ましう見給ふれ。なるとなかれなどいひけんも、ことわりにこそ侍れ。いかにやくなきとはずがたりこうじさせ給はんかたくなしさは、老の身のくせとゆるさせ給へとはぢこひたるさまも、心にくゝゆゑづきてみゆ。中将さもなやみ給ふべきことなり。そのこは野山を家とさまよひありき。浮雲にたゞふともいづこに身を置んこともやすかりなん。女はすべて人にしたがひ身を心ともせぬものから、みづからはこの世のにごりにしまで山水の心いさぎよく、衣のうらの玉もひかり見ゆべきさとりありとも、かざらずさまたぐる人のためにあしき道にもいさなはるゝかし。まいてわかきはどはと、おとなしうの給ふあるじそがいとうしろめたく侍りてとはいへど、しひてもきこえず、何となき世のことにうつりて、くれちからなりぬ。あるじは、ずさの中に心あるわかうど、かたちよろしきわらはとをさしはなち、この御前にきこえつけてつかふまつらせたりしかば、君もいつしかこゝろやすくよびつかひ給ふ。女などはいづ方にあるらんと、いぶかしくわらはをすかしてとひ給へば、しばしはまぎらはしてあらはにもいはざりしかど、をさなき心はおやなくて、此のとなりの山にこゝよりは、こよなうおもしろき家つくりしてすませたるなりとかたりきこゆるにれいの御くせは、まづ心うごきていとゆかしうおもほすべし。

（未完）

茶話指月集（四）

河東散人鶏巣
孤峰庵礫仙齋不美
關 葦 雄

右宗旦物語此以下數十件同前
但雜話附于後

附

宗易者泉州堺人、其先仕二于室町家一、而、勤二同朋役一。以二名曰二千阿彌一、子孫以レ千爲二稱號一。夫れ臺子は、茶湯の濫觴、昔阿彌慈照院殿相傳申上るの後、殊光に傳ふ。光は、紹鷗に傳ふ。鷗は故有て玄哉に傳ふ。今、宗旦より利休の臺子直傳は、藤村庸軒一人存命の由、此の人若りし時、故織を學び、遠州公に親炙す、强年に及んで、千家の蘊奥を採り、齡八十を過て、一日も爐火を斷さず、加レ之、平日書を讀み、詩を題するとを好む。暇ある時は、茶匙竹筒を製して、俗事に渉らず、門流甚だ多し。

註釋不美曰く、利休宗易居士は、和泉國堺町に住居して、魚納屋を以て商法とす。其の先室町家は、京都將軍職足利家に仕へて同朋たり。藝阿彌能阿彌相阿彌め等皆是、同僚たり。茶道法式は、義政公に襲失たり。同朋の職掌たる武に預らず、君側の吏員にて、曾て遊藝の事のみを、君命を承りて用辨す。休翁は則ち千阿彌の胤裔なれば、茶には大に縁故有事にあん。此の時より、茶は光鷗休と繼續し、來れ共、臺子の手前傳授に至りては故有りて玄哉に傳ふと有れども、翁より休も相傳を受げざるにはあらざるべし。如何とあれば、豊太閤の於二御前一臺子の手前勤められしにて判然せり。

○藤村庸軒翁の人となりを考ふるに、如二本文一壯年にしては古田織部正の門に學び、遠州公にも親炙せられ、强年に及んで、宗旦の門人となり、其の蘊奧を探り妙處を極められたり。三流に亘り、其の茶識追慕せずんばあるべからず。延齡八十を過ぎ、一日も爐火を斷さずと、是も一奇事なり。茶人社會の教へは、常釜と唱へ、日常釜を掛置自らも喝れば點茶し、茶友の來訪の一興にも、自ら點て進むるを最良の嗜みと定め、喫飯の時來れば、自分の食するものを分けて、客に供す。麁菜も主人の志厚き時は、其の味美なるべし。宗甫侯の壁書にも、一飯を進むとも、志薄き時は、早瀬の鮎水底の鯉と雖、味あるべからずと訓諭せられたり。平日は讀書を勸め、詩を作り、又暇ある時は、花入茶杓を削り、俗事世塵に

埋沒せずと云事は、誠に諸惡莫作衆善奉行にて、可レ言して行ふべからざる戒行と云べし。終身世人の否評を不レ受洒ゝ落ゝ一家の事を掌握して、家政の責ある人は、格別雖二婦人一家政を嗣子あり嫁ありへ、引繼以上は、主義を庸軒の如く、淡薄にして、いつ迄も不レ入世話をやきて、嫁哉若き人等に忌み嫌はるゝと云事は、此の女鑑抔御讀みの方には、其の女鑑と云名義に對しては、有ことには夢ゝあるべからず。

女子要書解題（其の一）

三浦千畝

わが國、女子に關する書籍甚乏し。啻に乏しきのみならず、日を追うて散逸し去らんとす。實に

をしむべき極みにこそ。さるに、或一派の學者は、舊來の女訓をもて全く前世界のものと排去し、最早今日にありて、半文の價値なきものゝ如く、ののしりちらすもあれど、そはなか〱に、短識の見解とぞいふべき、凡そ、ものには順序あり、階梯あり、何事かこの順序と階梯とを外にして、一歩も進むべき、明治今日の女子敎育をもて、舊來の女訓に負ふ所なしなど思へる人は、未だ眞に舊女訓を解せざるものにあらじか。特に新敎育と舊敎訓と全然、相背馳せるものゝ如く、若くは相背馳せざるべからざるものゝ如く論ずるに至りては、暴といふもおろかなり。看よ舊女訓の旨とする所は、孝貞にあらずや、義烈にあらずや、節操にあらずや、温良にあらずや、一身の勤勉一家の齊理にあらずや。知らず、新敎育にありて、孝貞義烈は問ふにたらざるか。節操温良は云ふに足らざるか。一身の勤勉一家の齊理は、顧るを要せざるか。いづくんぞ然らむ、想ふに、新舊兩者の相齊しからざるは、その末のみ。その本に至りては、元より新舊の別あるにはあらず。舊女訓いかでか忽諸に附しさるを得べき、故を温ね新を知るは事の順序なり。本を究め末を明にするは物の階梯なり。その末の齊しからざるを厭ひて、その本の同じきを忘れたるは、決して識者とは云ふべからず。舊女訓の端弊を捉へて、その本旨を沒却するは、われ等のとらざる所なり。女子敎育をいふもの、先舊女訓の本旨を知らざるべからず。舊女訓の本旨を知らんとせば、是非共女子に關する從來の書籍を讀まずばあらず。しかるに、今日は甚その書籍に乏しく、なかには、逸亡して、これを閲讀すること容易ならざるものさへ少なからず。まして、片田舍などにありては、

……史の外戚傳等參看すべし。（史籍集覧にあり）

その書名さへしられざるも多からんかし。これ余が陋識をも顧みず、慢りに女子用書の解題をものする所以なり。あはれ世の賢媛たち、そのもれたるを補ひ、誤れるを訂し、高教ををしみ給はずば余が幸にこそ。

一こゝにものせし書籍は、必しも敎訓を意味するもののみにはあらず。傳紀、文學、禮式、服飾等、總て女子に關する書籍は、漏れざるむことをつとめたり。

一配列は、ほゞ伊呂波順なれども、なかには、隨て讀み隨て記せしもありて、順序前後したるものあるべし。

ちうね識

以貴小傳

著者詳かならず。德川氏代々の母、夫人、侍女の傳を記せるものにして、家康の母、水野氏以下、十代將軍家治の侍女藤井家女まで、凡そ四十余人を載せたり。德川氏婦女の傳紀を知るには、此の書最と便なり。なほ柳營婦女傳及野史の外戚傳等參看すべし。（史籍集覧にあり）

螽期草　一冊

稻生恒軒の著なり。恒軒名は正治、字は見茂、壯き時醫を古林見宜に學び、研精殆ど寢食を廢せりといふ。業成て江戶に遊び、淀侯に遊事す、延寶八年正月廿六日歿す。歲七十一。その子若水、亦博學洽聞を以て聞ゆ。先哲叢談續編、稻生若水の條に曰く『恒軒嘗爲二其君一著二一書一、詳二論胎敎一、名曰二螽斯草一、總七篇、一曰胎敎、二曰保養、三曰臨產、四曰產後、五曰治療、六曰祈禱、七曰通論、雖三書以二國字一、持論徵實、足三以裨二益於後人一、藤井懶齋作レ序、元祿庚午歲始上レ梓、世知レ之者鮮矣、』蓋し、螽期草と題せしは毛詩の螽斯の篇によるなり。螽斯の詩の序に曰く、言若二螽斯一不二妬忌一、則子孫衆多也、（或は此書を若水の著とせしもあれど誤なり）

呂保殿歌合

序に、『こよひろほどの、はざまにて、かしをまもらせたまはむとて歌合あり……』と見ゆ。呂保殿とは香爐峰殿のことなり。かしは庚甲にして、即ち治暦四年十二月廿二日庚申の歌合なり。作者は、美作、小馬、宣旨、出羽相模、左衛門、中將、式部、出雲、中務など、皆當時名高き女房共なり。（群書類從和歌部にあり）

はなむけ草（袷入）　二卷一冊

貞享三年の刊行なり。刊本には、著者の名を記せざるも、此の書土佐國群書類從にありて、その奥書には左の如く見えたり。

寛文年中、松平土州公家臣宮川勘平と云る仁有。江戸にて知行四百石、一人の娘あり。よつと名づく。五歳の時母におくれ、かの宮川氏、無妻にて此の娘を養育しけり。十三歳の時勘平古郷なれば、はる〲土佐の國へ遣しける。此の草をはなむけに書てあたふるなり。土佐の城下高知に勘平姉一人有。男子有ければ、かの娘を嫁せしとなり。本文に森氏とかきけるは。かの娘の母の父にてぞ有ける。土佐公の御前、つね〲御いたはり深く、土佐へ越しころも、御歎かせ給ふとなり。

此の書、旨と女の心得べき訓戒のことども、あらあら書きしるされたるものなれど、實情字句の間にこもりて、いとめでたし。文章も亦拙からず。なほ按ずるに、此の書は佩戒女小學と題するものと、異名同書なり。佩戒女小學のことは、その條に云ふべし。

林述齋女訓　一卷

述齋は、實に林家中興の人なり。名は衡、字は讀詮、大學頭と稱す。當時述齋と交り、稱して

知己となす者は、皆一世の人豪なり。白川侯樂翁、堀田侯、水月などは、膠漆最も親しく、相往來すること、殆ど四十年なりしと云ふ。天保九年老を以て學事を辭し、居ること三年、佐藤一齋を召して後事を託し、爾後數日にして歿す年七十四。謚して快烈府君といふ。

此の書は、文政十年の著にして、例の儒者流の女訓なれども、彼の女大學などに比すれば、三從七去などの、ことごとしき文字は少く、旨と日常家庭の心得を述べたり。文章亦なだらかにして、更に漢學者の口吻なし。



曲亭馬琴の眼中に映ずる女性を論ず（其の十五）

白松園主人

野を走る獸、空飛ぶ鳥すら、人のめぐみは知る者を、況んや心さかしきおさんは、養育の恩ある上に、輪篠のいと情ある心のうれしくて、半六夫婦を、主の如く、親のごとくに敬ひ仕へて、孝順更に比ひなし。輪篠はこの擧止を見てふかく歡び、言の叙ありし時、二人にいひて曰く。

おん身二人、かくひとつに生育こと、過世よりの縁しにやあらむ、日來いひ聞かしつる如く、行末は必ず夫婦さすべし、然らば半七は、彼が孤なるを憐み、おさんは又、わが夫なりと思ひて侮らず、互に睦しうし給へ…………

かく云ひ諭すに、二人の童はよく、其の心を得て、爭ひ逆ふことなく、共に遊び共に居るに、近隣の人もその故を知りてかく云へり。

げに容色の清らかなるさ、心ざまの怜悧さ、いづれ劣りも勝りもせず、こはよき一對の夫婦なりさ、稱むる毎に、二人は顔を赧らして、物の陰に隠れけり。…………

抑も子を教養するに、幼より須らく、膽を養ひ氣を尙ぶをもて、男兒を導くを要す、婦人の手に育せらるゝさへあるに、況んや女兒と共に居らしめ、亦共に遊ばしむ。何ぞ女々しき事の甚しきぞ。嗚呼輪篠の賢と雖も。未だ其の子を教ふる道を知らざるに似たり。但し輪篠の心事を推すに、云ふに忍びざるの思ひ潛めり。彼はおさんが父の半六の斧に殺され、その孤なるおさんを愍むと共に、その父への約を重んじて、專ら死者へ對する義と、おさんのあはれなる身の上とに對して、寧ろ我が子半七を犧牲とするもよろしといふ感に堪へざりしなり。即ち此の慈心と義氣とに驅られてなせる結果なり。強ち愛に溺れて、女々しく育てんとせしに非ざるを知るべし。

其の翌年の秋、落葉散り布く頃、輪篠が左右の腕俄に腫れて、苦痛に堪へず、病むこと七日にして、湯水も咽喉に下らず、輪篠今はと思ひければ、半六に向ひて、去年の秋、米谷の楠を枯して、一二の枝を斷り給ひしかば、その祟り今我が身に報いぬと覺えたり。但しその祟を一身に受けて、それにて夫兒のうへに恙なくば、死すともなか〳〵幸なり。只死後の妄念ともなるべきは、半七おさんが事なり。願は妾が息のうちに、妹脊の緣を結ばせて、儀式は齊はずとも、まのあたり、盃せさせて賜はらばや、といふに、半六うち點頭、楠の祟といふは御身の惑ひなり。半七におさんを妻あはすことは仔細なし。されどおさんはまだ十歳にも足らず、半七も十一才の童なり。されども御身が心やりともなりて、命延ぶる功德之に增すことな

らじ。折しもあれ、今日は黄道吉日なれば、只今彼等に盃せさせなば、おさんが父の旅魂も、うれしうこそ思ふらめと答へて俄に其の準備をなし、半七に袴着せ、おさんに衣着更させて、輪篠が枕の左右は對座せしめ、下婢に土器の用意せさせ、熨鮑に銚子とりそろへ、二人が間に居ゑたり。さて輪篠いかなる言をかなす、讀者その蕭めやかに哀れなるさまを、摘み見給ひね。

その時、輪篠はやゝ身を起して、我が子と、おさんとを、と見かう見て、涙を潸然と落したるが、又莞爾とうち笑みて、寔に似つかはしき夫婦なり、玉椿の八千代までも、睦み語らひて、子孫あまた儲け給ふべし、事改めていふべしもあらねど過にもせよ、いぬる秋、丹波郡どのは、我が夫の斧をもて命を隕させたれば、おさんが爲めには寃家なれど、その過を償はんとて、貧しきときより養ひとり、今半七に妻あはすれば、半六どのは丈翁なり、將養育の恩高きを貴みて、等閑にな思ひ給ひそ、半七は亦義理ある姿といふを忘れず行末いかなる事ありとも、生涯おさんを見捨給ふな、かくいひしらすとも、成長りて、思ひ忘るゝ事もありなん、かたみに忘れ、忘られざる誓ともなるべければ、今おさんが護身嚢と、半七がとを交易て、膚離さずば、妹と夫の、誠を神も憐み給はめ。…………

此の文を讀む者、誰か親の有難き恩愛に、涙を落さゞらむ。さて輪篠は、更に二人を戒めて曰く、

……女の妬心なきは、百の拙きをかくすとぞ、貞女義男の故事は、賢き人の記しおける、吾見ても知り給へ、他し人に心を移して、母が遺言に悖るものは、不孝の子不義の婦なり、よく臍を固めて、思ひ悞ち給ふべからず、是はこれ夫婦がうへの誡ぞかし、おさんは又三歳の時に別れし母御ありと聞けば、神佛に祈念してひかれよるべは三昧線の、撥を割符に環會、親子の名告し給へよ、半七も力を戮せて、華洛へ上る序あらば、外ながら彼の人の、往方をよく／＼聞き定め、その夙願を果させ給へ忠孝の道はいふも更なり、聞ゆべきは只是のみ、命長くて諸共に、五十年忌の末までも、我がなき後を弔ひ給はゞ、草の原にていかばかり、うれしから

むさ思ふにも、名残なしやさばかりに、捷ふに餘る恩愛の、涙に袖はそぼぬれて、項に掛けたる子どもらが、護身嚢なさりがねさせ、夫のかたへ會釋すれば、半六やがて土器を、おさんが傍にさしつくろ、三三九度の勸杯も、今ぞ戴く親の恩、半七も諸ともに、母の教訓身にしみて、涙に濁す味酒の三輪の苧環くりかへす、婚姻の式果てにけり。

あゝ誠あるかな、輪篠の言の葉、あゝなさけあるかな輪篠の行、かくてこそ女子の光はあるなれ、此の如き人に育せられて、邪惡の人となる事は、風狂人の外には決してあらざるなり。此の惜むべき婦人輪篠は、病遂に癒ゆるに及ばず、去つて白玉樓中の人となれり。半六が愁傷云へば更なり、半七おさんの哀悼たとふるに物なく、紅涙空しき枕を浸せり。嗚呼北邨一片の煙、土墳数尺、一經涙盡きて、愁未だ盡きず、夜更けて漏るゝ鉦の音、もの寂しくぞ日を送りける。あはれ聞きたき者は二人が子等の久後かな。念じてまつは我のみならじ。

（以下次號）

大和めぐり（承前）

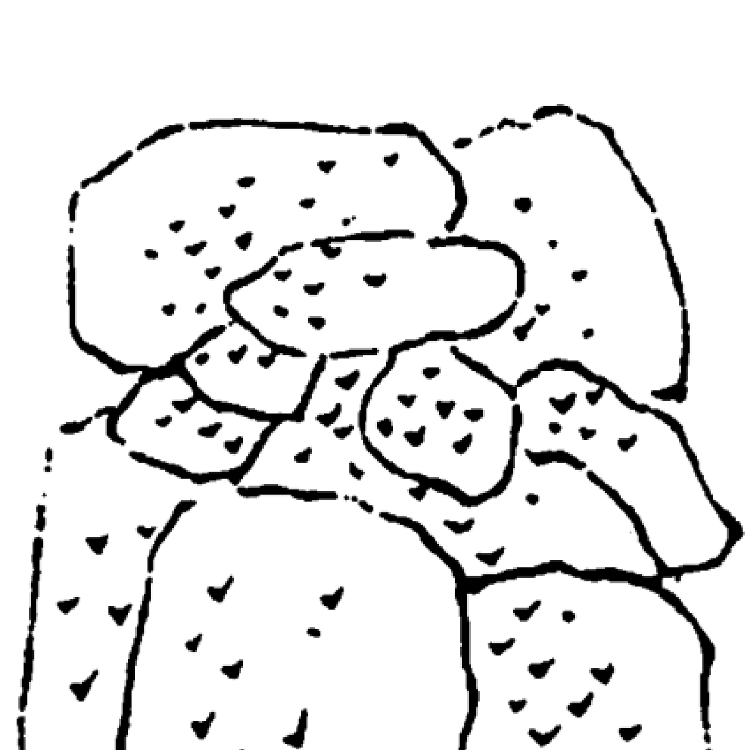
井上頼文

土舞臺

頼文いはく。多武峰より、岡寺にゆく所のつゞらをりは、水落ちて、石なめらかなる苔の細道なり。めぐりめぐれるさまは、さながら、大蛇の脊をふむに似たり。木の葉ふきまき、吹きあぐる風すさまじく、をりにあひてものすごし。やゝ、うち開けたる所に出づれば、右は畑にて、岩の如くそばだち、左は田にて、池の如くはめり。その田の中に、島山の如き石むらあり。ゆゑありげに覺ゆれば、おりたちて近づき見るに、竪は一丈二三尺

もありぬべく、横は二丈あまりもあるべき岩山なり。内はうつろにて、石のはざまより、薄く力なき夕日のかげ、心ぼそげにさし入りたるは、いささか昔のあとを照らすもの丶ごとし。こは、あがれる世に時めきしあて人の塚なるべし。いつの頃にか土をくづし、石棺をこぼちて、たゞ石廓のみ、あさましく殘し置きつるなりけり。いたゞきに登りて見れば、第一期の制作の如し。天井は一枚石にて、八尺に一丈もあらんかと覺ゆ。この塚つきたてけん、そのかみは、いく百人の力をか用ゐけん。この搆造の廣大なるに依て思へば、副葬品などもあまたありけん。内部のさまは、今朝見つる安倍山なる甲の石窟に似たらんを、入口に千引石のよこたはりたれば、せんかたなし。かのなにかし法師が、あと吊ふわざも絶えぬれば、いづれの人と名をだにしらず、年々の、はかの草のみぞ、心あらん人は、あはれと見べきを、はては、あらしにむせびし松も、千とせをまたで薪にくだかれ、ふるきつかは、鋤かれて田となりぬ。その形だになくなりぬるぞかなしき。となげき、ふるきから歌に、白楊多二悲風一、蕭々愁二殺人一とうたへるおもかげ、まのあたりうかびて、あはれさいはんかたなし。かたへの農夫に問へば、この石窟を、里人は、石舞臺とよべりといふ。また里の名を問へば、高市郡、高市村、大字島莊村なりといふ。

石舞臺略圖



石舞臺は、推古天皇、二十年、百濟國より、味摩

之といふ人來朝す、呉國の妓樂を舞得たりといふ。よりて勅して、幼童をあつめ、櫻井にて習はしめ給へりと、日本紀に見えたり。すなはちその跡なりと諸書にはいへど、つら〱に盤石を積みて、内を洞の如く作りなしたる結構を見れば、上古高貴の人を葬りし上古の墳墓たる事論なし。

道の幸に　屋代弘賢翁が

島の庄村、右の畑中に大石をつみたるあり。土人は、いはやといふ。古き墓穴のあばけたるならし。

と、いはれたるは、わが意を得たりといふべし。

逝回丘

往還の大道より右折して、岡寺にゆかんとするつまさきあがりの、いとせまき阪路の左に、こだかき處あり。そこなりといふ。

萬葉集に丹比眞人の歌

明日香河　逝回岳之　秋芽子者
今日零雨爾　落香過奈牟

とある逝回岳を、ゆきゝのをかと、訓みて地名とせるは誤なる由、雅澄ぬしのいはれたるは、地勢上より考ふるも、うごくまじくおぼゆ。

新後撰集に　普光園入道、前關白左大臣

飛鳥川ゆきゝの岡の葛かつら
くるしや人にあはぬうらみは

續今古集に　家隆

待人のゆきゝの岳も白雪の
あすさへふらむ跡や絶えなん

風雅集に　爲家

旅人のゆきゝの岡は名のみして
花にとゞまる春の木のもと

よめるは、かの川上なるいつはむらを、川上のゆつはのむらと地名によめる類と同じあやまりな

り。かゝるたぐひは、歌書に多し、こゝろしてよむべきなり。

第二百十五號　正　誤

さしてゆくかさぎの山の紅葉は
　　たびの衣も色かへてけり

と、ある前に左の數行の入るべかりしを、植字の際脫落せるによりて、こゝにしるす。

三日午後　　顯文いはく。本日午後の日記々者は、安藤氏なり

此の紅葉館といふは、またの名を、花中屋ともいふとかや。春秋の眺め、とりぐゝに、めでたくやあらむ。さて案内せられたる別宅の方は、先つ頃、二位の局の、休みたまひし所なり。二階より見いだせば、おもしろく造りなしたる庭のさまなるに風にたぐひて、紅葉の散りくるなど、いと興あり。さて、ひるげなど、しをへて、いでたつ。そもや、おのれ、こたび、こゝに尋ね來て、先づ驚かれたるは、山のけはひの、おごそかなるなり。次に、目さむる心ちせしは、滿山の紅葉なりけり。されば、登り來る道すがら、二つ三つうめき出されたる物なきにしもあらず。みちのくなる埋木の、いかでか埋れさすべき、とて、書きつき。

柿屋餘談

赤松景福

○一日我が師問ひたまひし時、雨ふりければ、己先詩つくり出たり。その詩、

點々梧桐上。涼聲響二小櫳一。留レ君今夜雨。
太勝二石尤風一。

師倭歌にて返し。

降雨にあるじの心しられけり
　　しひても人をとむるなりけり

○我が讃岐國三木郡白山といふ山の麓に、一の石

橋あり。此の橋の作りざまなどは、常の橋と異なることもなく、打過ぐれば名たゝる橋とも見えねど、昔より去橋といひて人のかく知れるものなり。いかなる故にか有けむ、婦女此の橋を過ぎて、人に嫁くものは、その家に未遂ずして、去らるといひつけり。さる故に此の道を過ぎて嫁くものは、此の去橋の南は別に渡せる橋よりして、必ず去橋をば避くる事となれり。己思へらく、此の去橋を避きて嫁きしものも、其の末遂ざるがなきにしもあらざるを見れば、只橋を渡るにのみ心して、世渡りには常に心懸せざるにや。己こゝを過ぎし時よめる、

去橋を心にかけて忘れずば
　　いもせの道は安くすきなむ

また

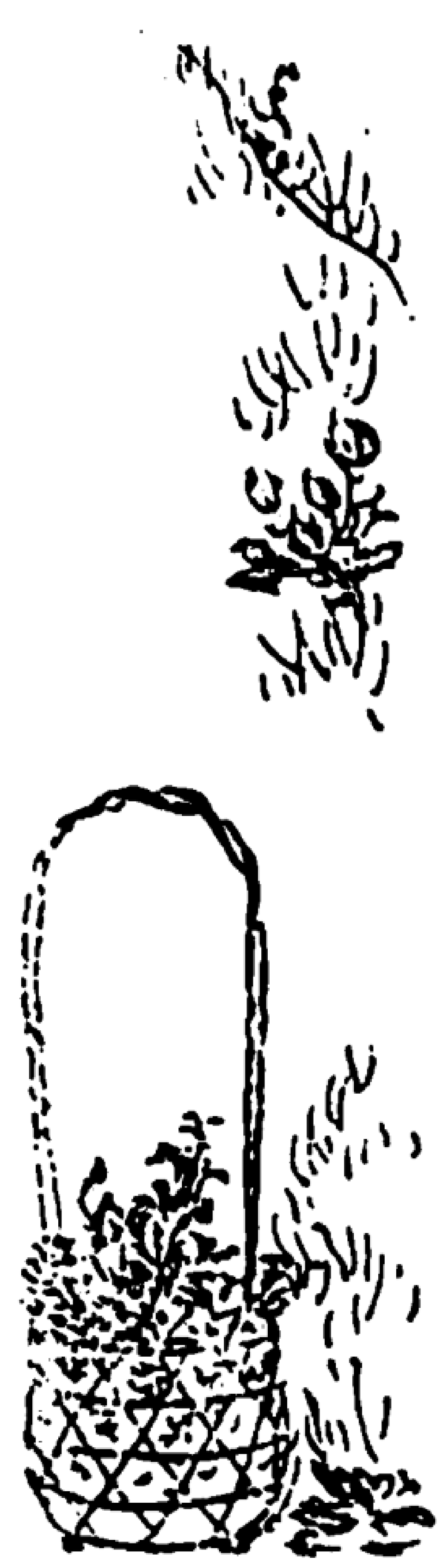
うるはしき妹背の道は白山の
　　たゞこの橋にこゝろして行く

又作れる詩

白山之下芳草處。去橋去橋名夙著。云是婦女新嫁時。若渡此橋被二人去一。有二婦徳一者今寥々。貧者多淫富者驕。婦女若不レ知二七去一。人間無三處不二去橋一。

○ある夜漆原元宜ぬしの家に宿れるに、夜中に簀の子を行けば、庭は木の間に鳥のおどろきたちいでけるを見て、

梓弓ひければもとすゑよるたちぬ
　　ねとりは射ぬをなれはゑらずや





樂園

しのぶ旅路

永潛生

梯を渡りて本寺につく、客殿に通されて、もてなしいと懇なり。衣ぬぎ捨てゝ、溪水に浴す。汗も暑さも洗ひつくされたる心地す。青山捷に入り、涼風室に滿つるの處、肱を曲げて當寺の開祖愚中禪師の年譜語錄など繙く、おかしきふしも少からず。

禪師は、岐阜の人、幼より穎悟の譽れ高く、十九にして、早く明國に渡り、佛通禪師に從ひて、法を修む。情誼日にあつしとかや。止まること數年業成りて歸る。これより雲水に心を任せ、脚行の功を積み、大悟化脱し玉ふ。丹州金山に錫をとゞめ玉ふこと久し。晩年に及び、安藝の大守小早川春平公、師を招し玉ひ、この地を相して寺を創め玉ふ。時に應平某の年にして、今を距ること五百餘年の昔にあり。寺の名は、佛通禪師の功を追思して、名つけ玉ひしよし。源相國義持公嘗つて、禮を厚うして、敎を乞ひ玉ひしに、辭して行かず、固く請ひて後ち行て不言無爲の要を說き玉ふ。相國深く之れに服す。物故し玉ひしは、八十七歳の時とぞ聞えし。謚を賜うて、仰德大通禪師と云ふ師の名は、周及愚中と號す。あはれ吾等愚かなる者も、こを見るにつけて、ふるひ起ることなくてやは。

佛通寺は、御許山と號す。本寺を青心院と云ふ。本寺の外五院及び許多の末寺あり。禪家一派の獨

立本山にして、むかしは千有餘の末寺ありしと云へば。其の莊嚴如何にめざましかりけん。今は、只た、幽邃のむかしにかはらぬものあるのみ。父君に隨ひ、そゞろありきす。笛の竹もかなと林にいりて尋ぬ。蛇つゞきだしてはなど、人に問ふに絶えて居らずと云ふ。奥ふかく入りて、思はしきものにしるしつけて過る。

山寺の景色のおかしきは、夕暮と曙とにあり。入相の鐘しつかにひゞき亘りて、たえ〴〵に烟の立ち迷ひたる、緣の山は、やう〳〵蒼くなりゆきて、夕日かげの尾の上のこゝかしこにさしたる、ゑも云はずめでたし。日ぐらししきりに鳴く。

　山寺の夕への空を來て見れば
　　ひくらしの聲に秋は來にけり
　夕つく日さすや尾の上の松が枝に
　　夏をのこしてひぐらしの鳴く

など云ひつ立ちもえ去らず。日暮れはてたれは、唐歌などうたふ。腹もすきたるこゝちす。夜に入る。深山なれど、蚊いと少なし。住持の君きたり話し給ふ。くさ〴〵あるが中に、わきて耳あたらしく覺えしは、猿と鹿との話しにぞある。

此の山奧深ければにや、猿の住むこと夥たゞし。春の末つ方ともなれば、籔に入り筍を折りて喰ふ。大方四五十の猿共群をなし頭と覺しき親猿、先づ忍び寄りて人の氣はひを窺ひ、仲間のものを招く歸るときは、この猿、又、殿となりて味方をまもるよし。根の甘き所少し、噉みては投げ捨つる故、三四百の筍は、また〻くひまに折ると云ふ。去れば、夜晝人つけて守らすに、其の忍び入るさまいかにも巧みにして、たやすく氣附くべくもあらねど、一度入り來るや、食物を爭ひて啼きさけぶ故、人にしらるゝなりと。さても淺まし

さは猿智慧あり。

鹿の話しは、一しほをかし。雪降り積る冬のあしたありけり。手負ひたる鹿のこなたに馳せくる音す。獵夫は逃さじとて、頻りに犬をけしかけゝるに、鹿は悲しき音あげつゝ、庵の内に飛び込む。今一あしのところにて、危く噉み殺さるべき所ありしとよ。さつをは固く鹿を渡さんことを請ひけれども、苟も命あるうちは、全く汝の獲物とは云ひがたし。此の鹿若し不幸にして、斃れなば、其の時こそ遣はすべけれとて、漸く諭し返へしつ。鼠枕と云ふものゝ實に野菜など交へて飼ふ程に、日頃へて疵も大方癒えたれば、いざとて放ちやるに、初めの程は顔丈出たして、外の方をうかゞひ、やう／＼に全きからだを出して、あたりを見廻し、今は心安しと思ひけん、三度び庵をめぐりて、馳せ去れりとぞ。慈悲を旨とせる僧侶と、ものゝ命取ることを生業とせる獵夫との問答は、如何に面白くやありけむ。悉達太子のふることをも思ひ出でられてゆかし。獸すらだに深き情には感ずるものを、など語ふ程に夜やふけぬらし。溪聲松籟に和して、さながら萬馬の襲ひ來るが如し。さらぬとて、寐ねつ。水鷄こゝらありと聞つるに、待てども鳴かざりけれど、

山寺の夜すがらさゝぬ槇の戸を
たゝく水鷄もあらじとぞ思ふ

など云ふ程枕の上にひゞく水の音は、いつしか夢に入りて淸し。

さらぬだに長しと思ふ夏の日を
なかくゝらしゝけふにもあるかな

旅のらくがき

深山庵主人

明治三十二年熊本の旅舍にて

(三)熊本人の女罵る言葉

關東にては、女罵るにスベタと云ひ、阿魔ッチヨと云ひ、京阪地方にては、お轉婆阿婆摺れ自墮落者など云ひ、其が醜き形容を爲すには、狆が灰吹きし樣な顏とか唐茄子に目鼻つけたなど云ふが熊本にては罵り方の、余りに面白ければ、書きつくるなり。そを何かと云ふに『アノ女のザマアクサイバレンの下のホッコクワクドウの樣な面して』といふなりクサイは、ある穿鑿家は、『こそあれ』の轉訛なりと云へり。『そうしね』『そうしてな』など云ふ可き意味の所に用うる方言にして、熊本人は始終之を口に絶たず、バレンは葉蘭なりホッコクは、北國か、未だ考へず。ワクドウは蟾蛙のことなり。いふ心は、其の顏貌の醜葉蘭の蔭の蟇蛙の如しとなり。所謂奇想の天外より落つるものにして、其の一種の語調は、如何にも冷酷を極めたるが如く、而も云ふ可からざる輕妙を感せしむるなり。此の外に、尚『島原おコゼが東風かぜ吹いた顏』と云へど、全く前者の輕妙に如かずと思ふ(風吹くとは、感冒のことなるべし)

汗のかれ

(上)

山岡螢雪

ヨイヤドッコイショと鍬の柄を
杖に仲間のやすんでは
煙草をふかす其のひまも
クツクツと獨せいだして

朝は東雲夜は月に
夏冬通して一枚の
淺黄ジュバンの尻きりを
汗にひたして收益たる

僅な金の一割を
にち〳〵かゝさず銀行に
預けてこゝに二十年
隣家のおやじが云つてたけ

むかしの人の諺に
塵もつもれば山とやら
ほんとにさうよ虚言ではない
昨日のばんの勘定に
つもつた金が九百圓

今すこしにて千兩箱
おゝ嬉しやな汗の金
たつた九百といへばいへ

そんな大口きく奴に
十兩はおろか一兩も
あつた例しは借錢か
ぬすみかたりの其の金が

シルクハットに金目がね
暑さこらへてマント着て
葉巻くはへて揚々と
ハイカラ黨の氣取屋が
裡面は種々のこんたんに
濡手で粟の賄賂とは

以てのほかの論外だ
嗚呼我が金は汗の金

＊　＊　＊　＊　＊

道をはづして取込んだ
そんな汚れた金でない

＊　＊　＊　＊　＊

（中）

おらは七つで奉公して
嬉しや廿年の十二月
鐵砲かたに現役の
國の守りといでたつて
近衛の歩兵に選ばれて
觀兵式のあつたとき
場裡に入らるゝ者ならば
せめては犬になるとても
親しく君ををがまんと
おし合へしあふ人垣の
其の眞中のはれの場で
陛下に咫尺し奉り
いやしき身ながら捧銃
最敬禮もしたおれだ
三年つとめの兵役も
滿期除隊に先だつて
二年たらずの歸休兵
胸に勳章は飾らねど
故郷の土産は精勤證
わりやでかしたと親どもの
譽た言葉のありがたさ
夫から一づに孝行を
盡して仕へたかたはらに

　血氣盛のひたかせぎ
日々の收益の一割を
　末の望に貯金して
三十か丶へて漸に
　迎へた妻の女花房
それも當世流行の
　ヤツワイガヘシの束髮で
ダテの眼鏡にゴムの靴
　袴をはいて我れこそは
文明開化の貴婦人と
　ツントすましてゐる樣な
そんな浮薄なものでない
　女風情の生意氣に
男女同權チヨコザイナ
　むかし弉諾弉冉の
尊のお定めあそばした

　をとこ女の其の道は
歷史の上にもあきらかだ
　かのキリストも其の始め
アダムをつくつて更に又
　わき骨そいで作つたが
正しく女と云ふからにや
　なんで男とならぶべき
例へ美人でかねもちで
　和漢洋學できたとて
か丶る道理をわきまへず
　尊き婦德は御留主にて
ひがみ理屈をいふやうな
　おてんば女はおりやいやだ
おらが選んだ女房は
　無學で器量はわるけれど
田圃の仕事の片手間に

そゝぎ洗濯針仕事
他所の者まで引き受て
只一心にはたらいて
今は子供も三人で
親子合して五人口
いりめ重なる其の中も
預ける事にかはりなく
共にかせいで收益たる
金はつもつて九百圓
今すこしにて千兩箱
嗚呼嬉しいな汗の金

* * * * *

道をはづして取込んだ
そんな汚れた金でない

* * * * *

（下）

支那の王術がいつたには
かねは不淨だ阿堵物と
されどおえらが收益たる
金はきれいだ清淨だ

汗を流してためたもの
おらは徒にはつかはない
一朝國にこと起きて
若しや仇ある其の時は

ためた九百の其の金を
三つに分けて一つづゝ
陸軍海軍其のほかに
赤十字社の三ヶ所へ

文　林

早速上納つかまつり
妻子をあとに勇ましく
鐵砲かたに従軍し
日頃きたへた此のうでゞ
奴等を討てうちまくり
皇國に盡さん覺悟じやぞ
たつた九百といはゞいへ
おいらが積んだ此の金は

＊　＊　＊　＊

道をはづして取込んだ
そんな汚れた金でない

＊　＊　＊　＊

あゝ我が金はあせの金
國に捧げんときはいつ

嗚呼嬉しいな汗のかね
國にさゝげん時はいつ



文　林

夜落葉　　東久世通禧

静かなる小夜の寝覺をとふものは
いた屋の軒のおち葉なりけり

遠樹紅　　佐々木高行

常よりもくれなゐ深しむらしくれ
はれゆくあとの峯のもみち葉

秋時雨　　高崎正風

秋ふけて蕎麥生はなちる朝かせに
しくれそめけり山のへのさと

山家落葉　　津輕承昭

落葉かく子らもなけれは山すみの
にはの苔路はうつもれにけり

野逕霜　竹屋光照

このあさけ嵯峨のゝ道を過ゆけは
霜よりほかのいろなかりけり

森時雨　前田利鬯

一村のくもこそかゝれうちわたす
うへ野のもりや今しくるらん

落葉入簾　水野忠敬

玉たれのをすの中まてこからしの
かせのまに〳〵紅葉ちりつゝ

閑居初冬　岡部讓

きのふ今日にはのあさちにおく霜の
めにさへ見えてふゆは來にけり

落葉風　宮地嚴夫

木のもとに散積りたるもみち葉を
なほもさそひて風さわくなり

籬殘菊　北郷久政

木枯にくさのまかきはあれはてゝ
ひとり殘れるしらきくのはな

月前時雨　小出粲

月影もくもまをはしるこゝちして
あわたゝしくもふる時雨かな

名所島　三輪義方

うるはしき小貝を庭のまさごにて
なみをまがきのあまのいへ島

月下漫詠　井上頼文

あれはてし支那の大野の月かけや
さひしきものゝ限なるらん

暮秋月　蜂須賀隨子

菊の上におく初しもとまかふまて
あきもふけゆく夜半の月かけ

山寺暮秋　鍋島榮子

秋深きもみちのかけにやまてらの
いりあひの鐘をけふも聞かな

夜間水聲　南郷柳子

月影のふけゆくまゝによひよりも
みつおと高くすみまさるかな

山影寫水　柳原愛子

玉くしけ箱根のうみのあさあきに
ふしの高峯のかけも見えつゝ

山路落葉　小池道子

柴人にをしへられつるやまみちも
まとふはかりに散る木葉かな

初霜　松平健子

おきそむるあしたの霜の嬉しさは
染るこすゑのあれはなりけり

落葉深　小川直子

やり水もつもる落葉にせかれつゝ
庭にあふるゝふゆのこのころ

暮秋虫　佐藤蒼生子

やつれたる尾花が袖のほころひを
させてふ虫もあはれいつまで

枯野霜　中島歌子

木枯はふきしつまりておきまよふ
ゆふ霜さやく野邊のさゝはら

暮秋　宮地小東洋子

紅葉のかせもふかぬにちる見れば
いつしか秋のはては來にけり

秋の草々

待菊　諏訪忠元

朝夕につはみかはつてきくの花
さくをまつまも久しかりけり

谷川もみえぬ計りに枝たれて
　きしのもみちは今さかりなり

秋旅

たよりよき車もあれと秋山の
　もみちふみわけゆく旅路かな

秋海

風早のうらの朝きり吹はれて
　みるめはてなし秋の海原

山家秋涼

紅葉見につとひし人も散はてゝ
　ゆふ風さむし山かけの庵

暮秋曉

かれ〳〵に蟲の鳴ねも聞ゆつゝ
　わきもわかれのあり明の月

雜吟

師岡須賀子

深更月

更るまで眺れはこそ樂しけれ
　宵のみめでむ月の影かは

水仙

霜と見し菊より後に唉出てゝ
　み雪にまかふ花そこのはな

心

大砲も限こそあれ天地を
　貫くものは心なりけり

柱

火水にも燒ず流れすたふときは
　人のこゝろの柱なりけり

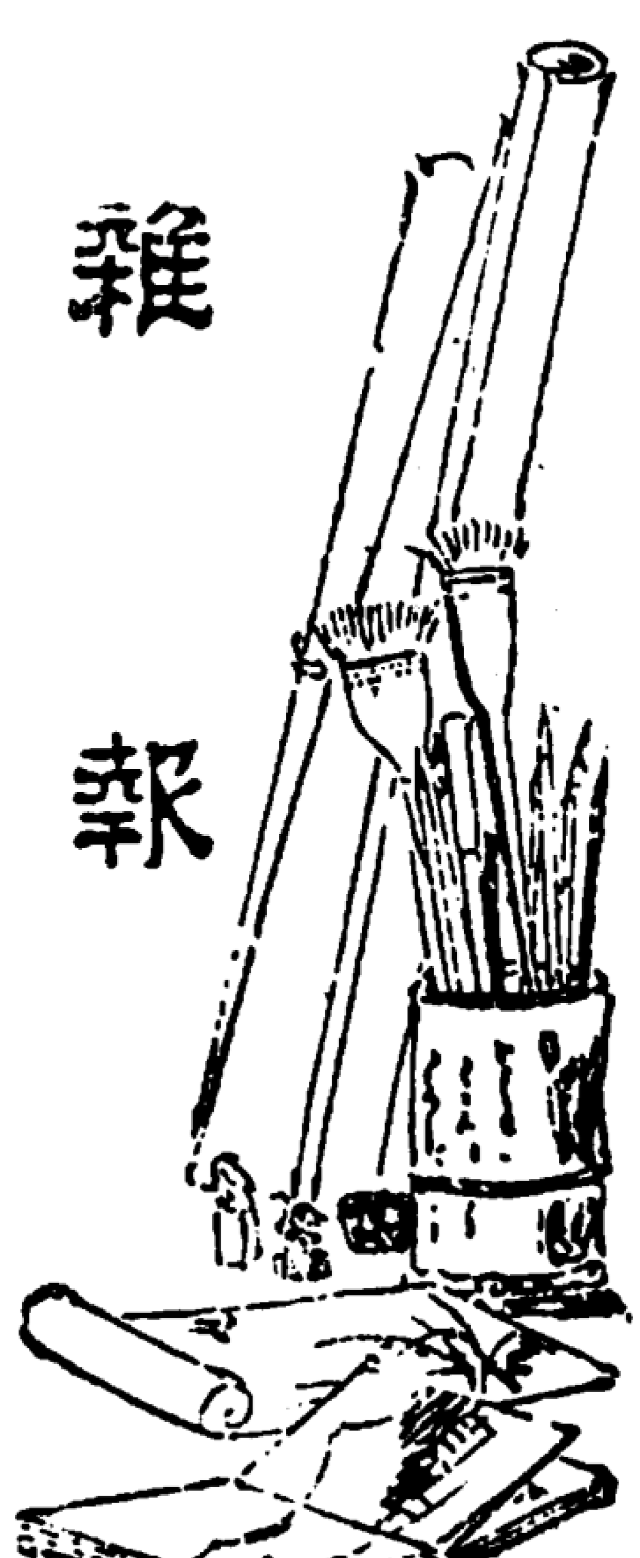
郵便

都へのあしたの文をしら川の
　夕もまたてよむ世なりけり

○秋の聲　小西甚之助

秋の哀は色に在る乎、聲に在る乎。稻田の末の入る日黄なる、蕎麥畠の花の朝露白き、共に哀れなり。されど色は鳴かす、なへて色は、憂寐の枕に通はざれば、秋の哀れは、われ色よりも聲に多きを覺ゆ。暮るゝを待たで松虫の露を命に先つすたく聲に、響き應ずる轡虫の聲して月毛の駒の足早く、影更けまさるさ夜中は、松の聲だに身にしむを、寐さめ音づる砧の聲、誰が夜寒の衣やうつらん。いとゞ故郷の懷しきに、妻戀ふ鹿のうらぶれて鳴く聲、何とて腸の斷れさらんや。啼きわたる鴈の聲は、はや曉や告ぐるらん。雲路にむせぶ涙かも。芭蕉葉そゝく村雨の聲窓に入る、我が床の海に水かさまさる心地ぞせらるゝ、哀れ〳〵、秋の哀れは、われ其の聲の多きを覺ゆ。

雜報



●行幸　天皇陛下には、近衛師團機動演習に付き、いにし十五日午後零時五十分上野發の滊車に召させられ、茨城縣下へ行幸あらせられたり。行在所は、西茨城郡笠間とうけたまはる。御發着割左の如し。

△十五日午後零時五十分上野停車塲御發輦午後四時三十分笠間停車塲御着輦、笠間町なる西茨城第一等小學校御駐蹕△十六日、十七日、演習天覽△十八日、笠間停車塲御發輦御還幸

尙行幸供奉は、德大寺侍從長、田中宮內大臣岡澤侍從武官長、丹羽書記官以下、侍從式部官侍醫、及び、侍從武官等の人々なりきとぞ。

●皇后陛下の御仁德　皇后陛下には、夙に山川權掌侍を廣島豫備病院に差遣はされ、内外負傷病將卒に對し、優渥なる旨を傳へさせられ、且つ御下賜品分與せられしが、御慰問使は、歸京の後、負傷者の狀況を、つぶさに奏上せしに、陛下には、いたく負傷者を憐み給ひ、兩眼を傷けられ、或は手足を切斷せられたる内外負傷者に對し、義眼義手、義足を下賜せらるべしとのありがたき御沙汰ありければ、桂陸軍大將は　陛下の最も畏き御仁慈に感泣して、直に廣島なる別役留守師團長の許に、思召の程を通達し、同師團長より、更に豫備病院長松本三郎氏に達し、院長より、此の旨内外負傷者の各に傳へしに、一同感泣に咽びたりといふ。

●天長節　いにし三日は朝來拭ふが如き晴天なりしが、觀兵式を始め、諸の御式は、萬民歡呼の裡に芽出度御執行相成り今左にこれを列記すべし。

▲早旦宮中御祭典　宮中にては、早旦より、式部官御殿の御裝飾を奉仕し、午前九時奏樂の裡に、賢所神殿の開扉をなし、神饌を供し、掌典の祝詞了りて、日根野侍從は　天皇陛下の御代拜を、姉小路掌侍は　皇后陛下の御代拜を大迫東宮侍從は　皇太子殿下の御代拜を吉見東宮女官は　皇太子妃殿下の御代拜を奉仕し、各御玉串を捧げられ、次に宮内省官吏參拜ありたり。

▲觀兵式　陛下には午前八時卅分德大寺侍從長の御陪乘、閑院宮載仁親王、久邇宮邦彦王の兩殿下、田中宮内大臣、川口次官以下の供奉（岡澤侍從武官長は所勞の故を以て供奉の列に加らず、）鹵簿は、第一公式にて、青山練兵場へ行幸あり、鳳輦は同九時五十五分近衛軍樂隊、君が代の奏樂中に、陸軍大學校脇より御着、場、直に、練兵場の東部

に設けられたる、テント内の玉座に着御あらせらる。是より先き、小松宮彰仁親王、同依仁親王、華頂宮博恭王、梨本宮守正王の各殿下を始め奉り、當日の諸兵指揮官奥中將及び、山本海軍大臣、大山參謀總長、伊東海軍々令部長、野津教育總監、佐久間中部、黒木西部兩都督以下の陸海軍武官數十名並に露國公使ウヰスボルスキー氏、清國公使李盛鐸氏、米國公使バック氏、韓國代理公使朴鏞和氏、及び、各公使館附陸海軍武官、佛國軍艦乘組將校等、何れも、先着し、定めの場所に整列して、奉迎したり。當日式場に出でし、諸部隊左の如し。

近衛師團の歩兵四個聯隊、輜重兵大隊、騎兵聯隊、工兵大隊、鐵道大隊、砲兵聯隊、野戰砲兵第十五第十三第十四の各聯隊、第一師團の歩兵二聯隊、工兵第一大隊、輜重兵第一大隊、騎兵教導中隊並に幼年士官兩學校生徒軍樂隊、この總數約二萬人、玉座の左右正面に位置して整列し、近衛師團長長谷川中將、同參謀長牟田砲兵大佐以下第一師團長河村中將、同參謀長星野砲兵中佐以下いづれも諸隊の先頭に在り。

陛下には、御着後各皇族殿下並に親任官、勅任官以上の諸官、及び、列國公使外國武官等へ拜謁を賜ひたる上、御愛馬友鶴に召させられ、小松元帥宮、大山元帥、野津、佐久間兩大將、寺内中將以下を從へさせられ、諸兵指揮官奥中將の御先導に依り、君が代の奏樂中に御閲兵あり、この時歩兵隊の軍旗は、聯隊の先頭中隊の右翼に、騎兵隊の軍旗は、第二中隊の右翼に位置し、聯隊長、及び、獨立團隊長は、御通御の際捧銃捧刀立鎗を號令し、御閲兵終りて、玉座に復御、同時に奥諸兵指揮官は、喇叭手を麾きて、前への號音を吹奏せしめ、分列式を開始す。銃劒閃々日光に反映するは、歩兵聯隊あり。馬蹄戞々長槍を横へたるは、騎兵聯隊あり。野戰砲兵第十三聯隊か、新式速射砲三十六門を携へて參加したるは、今年始めて觀る處にして、諸將の目は期せずして、此の一隊に

注げり。

又、騎兵實施學校の敎導中隊も、本年新たに加はりたるものあるが、各部隊中步兵聯隊のみ、大隊長の姓名を奏上したり。分列式終るや、十時四十五分還御仰出され、奥諸兵指揮官は、喇叭手の號音を以て、諸隊に陸軍禮式附錄第三十六條の敬禮を行はしめ、君が代の奏樂中に、鳳輦は鶴の舞ふ千代田の宮城に還御あらせられ、諸隊は順次に歸隊したり。

▲宮中御宴　午前十一時靑山觀兵式場より還幸あらせらるゝや、各皇族殿下を始め奉り、田中宮內大臣以下宮內省勅任官の拜賀を受けさせられ、終りて德大寺侍從長田中宮內大臣等を從へさせられ、豐明殿に出御（御通御の砌り西の溜に於て伯子男爵及有位者の拜賀を受けさせられ）奏樂中に玉座に着かせ給ひ、各大臣、各國公使等に宴を賜ひ、朕は本日の誕辰に際し、朕が最も敬愛する交際列國の外臣、並に、朕が政府の臣僚と共に、此の宴を共にするを歡び、且つ深く卿等が、之を祝するの誠意を嘉納すとの勅語を賜ひ、列國公使に對しては、三宮式部長通譯して、之れを傳へ、首席公使白耳義國特命全權公使アルベルダヌタン男は列國公使を代表し、西園寺臨時總理大臣は群臣を代表して、各々奉答の辭を奏上したること等は、御恒例の如し。

●觀菊御會　天皇　皇后兩陛下には、菊會御催しの爲め、いにし十二日午後二時御出門御同例にて、赤坂離宮へ行幸啓あらせれたるが、　天皇陛下の御陪乘は德大寺侍從長にて、田中宮內大臣、岡澤侍從武官長以下供

奉、皇后陛下御陪乘は高倉典侍にて、香川皇后宮大夫、山内皇后宮亮以下供奉にて、離宮着御あらせらる。御先着の方々は、小松大宮同妃兩殿下、閑院宮同妃兩殿下、小松若宮同妃兩殿下、華頂宮、山階宮同妃兩殿下、久邇宮、梨本宮の各殿下を始め奉り山本海軍大臣以下各大臣、土方伯以下の各大臣禮遇者東久世樞密院副議長以下各樞密顧問官並に各國公使同夫人令孃近衛公、徳川公以下の各有爵者同夫人令孃等ありしが、皇族殿下並に親任官、親任官待遇者各國公使等は、御休憩所ある萩の御茶屋の前面なる兩側に、他の文武官、其他は鮫ヶ橋門内に、何れも整列奉迎 兩陛下には、萩の御茶屋に入御、御少憩 後御苑内に出御、滿園の菊花を天覽あり、陪觀者には通御の砌御道側にて拜謁仰付られしが、軈て假立食所内なる玉座に着御、各國使臣、並に、外來の紳士に對せさせられて親しく優渥なる勅語を賜りたる上、御宴を開かせられ、四時三十分還御仰出されたりといふ。

●伏宮宮殿下鋭意軍事を治め玉ふ　伏見宮貞愛親王殿下は、畏くも金枝玉葉を以つて、進て戎軒に從はせ玉ひ、遠く姫路なる第十一師團長の任に趣き玉ふや、いやが上にも鋭意 管下戒飾せんことを努め、常に將校士卒を憐れみ玉ひ、時折の御優旨には、鬼の如き武士も、感涙に咽ぶこと屢々ありしが、去九月上旬該師團司令部に兵事會議を開せられたる後、左の決議、事項を聞こし召されしとぞ。

一、近衛現役兵にして免除願を差出すもの多し之を防止する方法を設くること

二、入營兵の家族にして自活の道なきものに對し有志團体に於て救護の方法を設くること

三、壯丁の教育程度を調査せしに頗不良なるに付此の點に對し普通教育の普及を設くること

四、徴兵檢査の際壯丁が華美なる服裝をなすの弊習を矯正すること

五、壯丁の体格の強壯を計ること
六、兵士の入營前其父兄親族を招き入營の心得方を說示すること
七、管下小學校教員をして生徒に對し學科の餘暇軍事的談話をなさしむること

●梨本宮殿下の御婚儀　梨本宮守正王殿下には田中宮內大臣の御媒妁にて、鍋島侯の次女伊都子姫と御婚約あらせられし由は、既記の如くなるが、御婚儀は愈來廿八日御擧行あらせらるゝ趣なり。

●閑院宮殿下の體育會支部御臨場　閑院宮殿下にはいにし十一日日本體育會埼玉支會岩槻支部へ御臨場あり、數番の劍術試合を御覽あり、了つて、劍士一同へ優渥の御辭ありしが、當日川村、奥兩中將も隨行したりと。

●赤十字社看護婦の卒業

▲證書授與式　澁谷なる日本赤十字社病院に於て、第十五回募集看護婦生徒卒業證書授與式を擧行し、例に依り、本社篤志看護婦人會幹事長、小松大宮妃殿下、幹事副長、小松若宮妃殿下、及び、閑院宮妃殿下等臺臨あらせられ、花房副社長橋本病院長外關係諸氏數十名參列したり。今回の卒業者は、同社準備看護婦十八名、支部選出に關る模範看護婦二十名、內成績優等の廉を以て、賞品を得たるは、山梨支部選出長尾きく、本社準備看護婦大瀧よしの二名なりき。

▲殿下の御諭旨　授與式に於て、幹事長小松宮妃殿下の賜はりたる御諭旨左の如し、

玆に本社第十五回準備看護婦生徒卒業證書授與の席に臨むは、賴子の深く喜ぶところなり。諸氏は、能く社業の旨趣を服膺し、教職諸氏の懇篤なる教導に因り、多年螢雪の效を積み、全科卒業の名譽を得られしは、誠に歡ばしき限りな

り、諸氏は、此の名譽を享くると共に、ますく勵みて、斯の道に懈らず、看護婦たるの職を盡すこに勉めらるべし。又、支部選出の卒業諸氏は、孰れも支部に歸りたらん後は、宜しく後進者を導きて、模範の業に盡されんことを望むにあん。

▲副社長及其他の訓諭　花房副社長は、生徒數年の勤勉に依り、今日の名譽を得たるを喜ぶと共に、養成係員諸氏の敎督、其の宜しきを得たるを謝し。尙は諸氏は、今後赤十字社看護婦として、學術操行、其の守るべきの諸點を勸告し、橋本病院長、亦一身の支持患者の看護等に付、肝要適切なる心得を諭したり。

▲ナ嬢の寫眞　各自をして、座右の鑑と爲さしむる爲め、從來の例に依り、卒業の看護婦一同へ、斯道の鼻祖ナイチンゲール嬢の寫眞を頒ちたり。

▲紀念の寫眞　式了りたる後、廣庭に殿下の臺臨を仰ぎ、參列者、及び、卒業生徒一同整列して、紀念の寫眞を撮りしとぞ

●梶田薄氷女史　閨秀文學者として、畵伯半古氏に配せし、薄氷女史は、久しく病床にありしが、いにし六日遂に長逝せり。女史本姓は、北田、先年梶田氏に嫁し、産後健康甚だ勝ぐれず、今秋に至りて、病、漸く篤く、終に起たざるに至れり。享年未だ三十に滿たざりき。

●女學校の消息

▲高等女學校の紀念式　大阪市立第一高等女學校にては、去月二十一日開校、第十五周年紀念式を同校に於て執行せり。來賓は菊池知事田村市町名譽職員、各學校長等、約五十人にて、午前九時三十分、號鐘を合圖に、四年生のみ式場に入り、次に來賓臨場し、栗同校長は、先づ御眞影前に進みて、御簾を揭げ奉り、一同最敬禮の上、生徒の君が代の唱歌ありて、同校長は　勅語を奉讀し、且つ式辭を陳べ、菊池知事田村市長の祝詞あり。生徒は　紀念の

歌を唱へて、式を終へ、同校長は、來賓を先導して、生徒の遊戲音樂唱歌の實習を遍觀に供へたる後、更に別室に於て、酒食の饗應あり、此の際今しも生徒が、短冊にものせし唱歌を領ち、同十一時過ぎ退散せり。右同校長、式辭の概要及び紀念の歌は左の如し、公費を以て、女子の爲めに學校を起せしは、實に京都を嚆矢とし、東京、此れに亞ぎ、其の次ぎは當大阪なりとす。乃ち明治十五年にして、當時は師範學校の附屬裁縫場として、建築したるものに係り、今此の式場なる樓上は、裁縫場にして、又、此の樓下は幼稚園たりしなり。而して同十八年に至り、幼稚園は廢せられ、裁縫場のみは、師範學校の女子部として、更らに樓下に置かれ、依然として裁縫の教授を繼續せしに、同十九年に及び、師範學校と分離して、獨立し、此の時初めて專任校長を設けられたり、而て同二十年に當り、

長くも

皇后陛下の御臨幸を仰ぎ奉り、且つ生徒授業の御奬勵として、若干の金圓を下賜せらる。本校の光榮實に此れに過ぐるものなし。加ふるに、其の翌二十一年十月を以て、御眞影を拜戴し、同二十二年九月に至り、當大阪市の管理に推移され、以て今日に及べり。而して、開校以來の卒業生は、七百七十三名にして現在の生徒總數は、六百二十餘名なり。最初の在校生徒は、當に僅々百餘名に過ぎざりしに、其の後年を逐うて、増加し、以て今日の如き多數を見るに至り。爲めに已に第二高等女學校の新設ありて、生徒を分つに及びたり。云々。

創立十五週年紀念日の歌　（同校撰）

數の園にしけりおふる　わかきの梅のはることに
色香をそへてしゞにさけ　きよきみさをふかきかをり
こゝろにしめて朝な夕な　いそしむ文つとむる業
雪をおかし霜をしのぎ　月日かされことしけふ
とゝせあまりいつとせを
千代のかたみけふよりは、かさすをとめ忘るゝな、なにはのさとのなにしおひて、四方にかをれやあはれをとめ、

○女子工藝學校、並に、特種幼稚園設立の計畫　小縣郡浦里村井澤重太氏は、女子教育及び、家庭教育改良を企圖せる熱心家にして、數年前より、女子教育不振を以て、明治照代の恨事となし、機業講習の傍ら、婦人教育の不完を實驗し、慨嘆の餘、地方に於て種々の方法を以て、婦女子を集め、實用的智識技藝を授けつゝありしが、益々、其の等閑に附す可らざるを感じ、數次出京、知名の士を叩き、之が方策を研究、遂に工藝學校を設け、（可成上田地方に設立せんとする志なり云）各所附屬の幼稚園を設けんとの計畫に、浦里村にて、該趣旨の發表講談會を開きしが、贊同者を得る傾き向なるにより、九月中旬有志勸誘の爲め、佐久地方出張、近々各地巡回の豫定なりと云ふ。

○横濱女學校の展覽會と演説會　横濱女學校にては、豫記の如く、いにし四日午前八時より、本町一丁目横濱會館樓上に於て、

同校生徒成蹟品展覽會を開き、尙午後一時よりは、女子高等師範學校教員安井てつ子、日本女學校學監三輪田眞佐子、及び、横濱市教育會長大谷嘉兵衞諸氏の演說あり、尙午後六時よりは、音樂會を催ふし、横濱女學校生徒數名の箏曲、山本東次郎の能狂言、熊介の薩摩琵琶、柳屋小さんの落語、大出文松、安藤文枝、福城河東の三曲、萩原龍太郎、萩原文雄の劍舞、千賀嘉代、外一名のヒヤノ等合奏等、數番を演じたりき。

○各府縣高等女學校一覽　（明治三十三年九月末調）

校名	位置	校長
東京府第一高等女學校	神田錦町一丁	伊藤貞勝
東京府第二高等女學校	小石川竹早町	林吾一
京都府高等女學校	上區寺町	河源一郎
大阪第一高等女學校	北區常安町	栗直太郎
大阪第二高等女學校	南區千年町	大村忠次郎
堺高等女學校	堺市車町	鈴木敏勝
新潟縣高等女學校	新潟市營所通	柏倉一德
埼玉縣高等女學校	浦和町	內藤慶助
群馬縣高等女學校	高崎市赤阪村	今井退藏
千葉縣高等女學校	千葉町	澁谷愛
茨城縣高等女學校	水戶市舊弘道舘	田井畝三郎
栃木縣高等女學校	宇都宮市	小堀源
奈良縣高等女學校	奈良市雜司	杉浦要太郎
名古屋高等女學校	名古屋市南外堀町	甫守謹吾
大津高等女學校	大津市	
彥根高等女學校	彥根町	山下新方
岐阜縣高等女學校	岐阜市	三吉艾
宮城縣高等女學校	仙臺市元寺小路	國分行道
信夫郡高等女學校	岩代信夫郡	小倉庫二
酒田高等女學校	羽後酒田町	折田重任
鶴岡高等女學校	羽前鶴岡町	淸水親和
米澤市高等女學校	米澤市	近新次郎
山形市高等女學校	山形市	神谷春治
福井縣高等女學校	福井市寶永中町	山口誘
金澤市高等女學校	金澤市	土師雙四郎
鳥取市高等女學校	鳥取市東町	宮崎眞藏　事務取扱
松江市高等女學校	松江市母衣	杉純介
島根縣高等女學校	石見濱田町	永山泰健
德基女學校	山口縣原狹郡	栗屋眞敬
岡山縣高等女學校	岡山市	宮津龜三郎
高知縣高等女學校	高知市帶屋町	靑木義正
福岡縣高等女學校	福岡市天神町	津田淸長
柳河高等女學校	福岡市柳河町	鈴木雄二郎

久米留高等女學校	久留米市篠山町	細見保
大分縣高等女學校	豊前大分町	十時文三郎
小倉高等女學校	筑前企救郡	杉山貞
宮崎縣高等女學校	日向宮崎町	川名蘇松

●女教員の不足　小學校女教員の不足は、男教員の缺乏より、一層甚しかりしを、改正令にては、男女學級を異にする場合あるが爲めに、女學級には、女教員を以て、之に充つるを適當とするとも起らんに、今日は、女子師範學校を設けある地方は、極めて僅數にして、師範學校女子部の設置さへ一般に行き亘らざるより、彌々女教員の不足を感ずるに至るや必然たれば、文部省は、今後大に女教員養成に向ふて、奬勵の方針を取り、獨立女子師範學校を各府縣に興さしめざるまでも、セメテは、女子部丈けにても必ず設置せしむるを要すとは識者の常に口にする所なり。

●曳杖案内　秋草は、がけもあやしうさらはえて、たゞ紅葉ばかり、奥山も端山も、唐紅にそめなせり。たれかは此の景色しき眺めであらんや。此にはたゞか府下の名所の一ッ二ッをかゝげて、其の人々が杖を曳かんたよりともせん。

▲品川の海晏寺　江戸名所圖會にて、紅葉の場所と信じたる人には、失望の種なるべし、維新以來の荒廢に、舊時の觀をとゞめず、近頃植ゑし若木の枝の、わづかに秋の錦の小切を織りかくるのみ且つ故岩倉右府の墳墓のあたりありて、ながむるゝ所なし、しかれども、岡上の紅の間より、品川沖の青波をのぞめば、強ち興なしとも云ひがたし。目下まさかりなり。▲目黒　夕日ケ岡わたりは楓のみならず、錦木、櫻の黄葉など打交りて、夕日の西に沈む頃、一入の見榮えなり、祐天寺わたりのもまた可し、▲音羽護國寺境内のも、矢張見頃なり▲瀧の川　は辨天山のは、過半おほかた紅

葉したれど、こゝの眺めの首なる川縁のは、まだ七分通り紅葉せず、其他不動の瀧、紅葉園など彼處に杖を曳く人もらしたまふな▲飛鳥山は　春の花と共におくれがちにて、またさかりとも云ひがたし。▲上野公園は　博物館前はよほどに梢に色づきしのみ、尤もよき眺めの場所としたる清水堂は、普請中とて人の登臨を禁ぜしはあたら、風情を殺ぎたり、こゝも見ころあり▲牛込西向天神　はあまり人の知らぬ處あるが、こは市ケ谷監獄前より、直眞に大久保へ行く坂道の左にあり、楓は少なけれど、木古く、田を隔てゝ眺むれば、まとに棄てがたき眺めあり。こゝに紅皿缺皿の墓あり、寒草斷煙つ裏にもとめ得べし。▲關口の芭蕉庵　だれでも入れねど駒留橋あたりよりは、誰れにても遠く眺め得べし、このあたり紅葉はなくともすべて佳き眺めあり。

三十四年一月五日歌文兼題

歌　新年

文　うれしきこと

十二月五日〆切

和歌和文添削

女鑑讀者の需に應す謝儀隨意

讃岐香川郡淺野村　赤松景福



十一月二十日兼題

水上落葉

天　大隅國肝屬郡鹿屋村中名　山田よね子

並ひすむをしのふすまとみるまでに
もみぢちりうくにはのいけみつ

地　肥後國下益城郡松橋町　黒田明子

水の面にちりかひうかふ木の葉ふね
わきをいづこにのせてゆくらん

人　駿河國富士郡瀧岡村　佐野みさ子

わか庭のよはのしくれのにはたつみ
ふたはみはよはもみちうきけり

人　丹後國與謝郡山田村　井田鶴子

あらしのみつらしと思ひし紅葉ばを
かへらぬ水のさそひゆくかな

（以下原稿到着順）

みるたびに數のまさりてみつの上に
ちりてうかべる木の葉ふれかな　柳　たけ子

あめさふるもみちは清きたにかはに
さらされてこそいろはましけれ　佐久間　八重子

谷かはのなかれもわかずおつる葉に
みちしまかへはふみやわたらん　中村貴和子

ふもさ川よさみにうかふもみちはに
みれのあらしのほこもみねけり　佐野　きやう子

秋ごさにたにの小川におもかけを
ちかひてうつすみれのもたちば　伊豫田　ふく子

こゝろにもあらて小川になかるゝは
しもにもたへぬもみぢなりけり　百瀬登代子

吹く風のまに〳〵みつにたゞよへる
おちはやひさのいのちなるらむ　關　勝子

たきの川みきはのもみぢーりしきて
くれなゐふかきみづのいろかな　高石登代子

吹くかせに峯のもみちはちりはてゝ　後藤信子

ふもとの川はにしきなりけり

あはれにも眺められけりゆくみつの
よさみのちりさちるもみちかな　板橋延子

いけの面にうかべる月のおぼろにも
みゆるはもみちちれはなりけり　板橋花子

なかれゆく水にうかへるもみちはゝ
ちる所をやわたりさいふらん　板橋直子

池のおもゝ見えぬはかりに埋られて
こすゑあらはにちる木のはかな　牧　衆子

おほゐかはさくらの落葉うきしづみ
はな見しはるのしのばるゝかな　川端まさ子

一しきりふき來るかせにたつたかは
木の葉のふれはつらなりにけり　永矢馥子

山の井にうかべるかげのをしければ
もみぢながらにくみてかへらん　高羽ふみ子

あらしにはもろきもみぢもなほ清き
水のながれをもとめてぞちる　高羽荻江子

すゝぎせし紅葉のもとのたまりみづ
おもはぬにしきうかびけるかな　香波愛子

川みつのみさりもあきはいろかへて
にしきながるゝこゝちこそすれ　鏡山増代子

木のはちる峰のあらしにやまの井の
あさくはみえぬみつのいろかな　武田龜子

庭もせのおちばをかぜのふきよせて
いけに木の葉のふねそうきける　背木たま子

たにがはゝ落葉ふりつみあさもなし
したゆくみづのおとはかりして　田中ふさ子

今よりはちれるもみちを船にうけて
かわつもみつのうへわたるらん　藤野節子

たに川のながれもみえすなりにけり
知れるもみちのにしきなりつゝ　芝　富子

いたづらに水にたゝよふもみちはは
くれにしあきのかたみなるらむ　小川政枝子

はらはらさちり亂れつゝかはみつに
うかふもみちにゆふひさすなり　北澤ふさよ子

冬のきてあらしもあかくかはみつに
みねのもみちはうかひけるかな　北原かつし子

あらしふく片やまさきの池のおもに
もみちのにしきあらはれにけり　中村きくゑ子

川みつにもみちみたれてくれなゐの
にしきさみゆるいりあひのころ　山路三七子

吹くかせにみねの紅葉ははやちりて
にしきおりなすたにかはのみつ　御巫ふし子

たつたひめそめしこずゑのちる折は
くれなゐあらふやまがはのみづ　道房千代子

おく山もあきの暮れにはおちはして
いつみのおもゝにしきさそ見る　佐藤保子

水のうへにうかふ木の葉のをふれには
すくなひこ名のかみものらさむ　村上操子

水のうへにちりてながるゝもみちはの
さまるみなさやいつこなるらん　田村多豆子

立田かはわたらはにしきさいひてし
みづにちりうくもみちをそみる　上原信子

秋はくれ木の葉はちりてみつの上に　栗田しげ子

みつの上にうかふ落葉のかすそひて
なかれてすゑはいつこなるらん　田代綾子

散りうかむちしほのもみち色いろに
なしのふすまさなりにけるかな　田代艶子

吾か家の小いけのみつもかはりけり
にしきおりなすみつのおもかな　田山芳子

水のいろもみねぬばかりに池の面に
かせになかるゝ木の葉よさみて　持地桃枝子

ふく風にきしのもみち葉かすちりて
うかふ木のはのなみにたゝよふ　野路ちか子

ふくさなき風にもたへておほゐがは
みづのうへにもにしきおりけり　南里貞子

今朝みれは夜はのあらしに池の水の
みづのうへこそもみちなりけれ　池澤天爽子

なかれゆく水もひさしほいろぞふさ
みねわかぬまでうかぶもみぢ葉　古瀬りく子

なかれ行く水おさそこにきこねけり
みるまあらしにちる木のはかな　牧野きよゑ子

さゝかはなさして筏士の せてきつ
木のはにうつむたにのかはづら　山田さこ子

かぜふけはうきつ沈みつかはつらの
あさは木の葉のちるにまかせて　早川のぶゑ子

あきの色染めし木のはのなこりなく
まなくさきなくちるもみぢかな　森このゑ子

水の面はふるさゝなきやもみち葉の
ちりてうかへるみづのうへかな　仁保しま子

にしきさかさるさころなりけり

あきふさくみれのもみちは風すきて
にしきなかるゝたにかはのみつ　椎野秀子

もみちはのちりてなかるゝおほゐ川
いつくやあきのさまりなるらん　椎野薫子

たつた川なかるゝもみちせきさめて
くれゆくあきのなこりさやみん　椎野清子

たに川のにしきさ見しは木からしに
みだれて落つるもみぢなりけり　松尾せい子

こからしにみぎはの紅葉ちりそめて
くれなゐなかすやまかはのみづ　松尾富美子

かくてこそ秋はいにしかおほ井がは
なかれてうきて木の葉ちるなり　平野琴柱子

おほゐ川うかふにしきはやまのなの
あらしにちりしこのはなりけり　西山てる子

むすふてら匂ふはかりにもみちはの
にしきうかへるやまのゐのみつ　稲垣ろく子

あかなくにこすゑはちりて紅葉はな
かは瀬にきそふゆふあらしかな　河野通子

たに川はしからみかけて木からしの
ひさ夜にあれしおちばうづまく　伊牟田吉子

谷ひはにはその落ち葉かさなりて
みづもくくりてなかれゆくなり　稲葉仙子

さゝ波のたつや小かはのみづの面に
おちちる木の葉ふれさこそみれ　永徳則子

かきやりてくむもいさなし山の井に
ちりてうかべる木々のもみぢ葉　吉富彦子

からにしきおり出す秋はかはみづの　高野眞子

いろをそめてもちるもみぢかな

立田かはながるゝもみぢせきとめて　村上昌子
しばしながめんあきのかたみに

谷かはのよどみにうかぶもみぢ葉は　井口素子
なみのうれうれあきをのこせり

くもの糸にかゝりし紅葉はかなくも　佐々富枝子
かぜにちりうく小田のいけみづ

もずのなくころ秋ふかくなりにけり　志方文子
もみぢちりしくにはのやりみづ

あき風にさほひて散りしもみぢばの　立山ゆき子
ながれもあへぬいけのおもかな

みづとりのゆめみる夜半の池の面に　藤井りゑ子
ふたつ三つ四つちるもみぢかな

くれなゐのさゞ波たちてもみぢ葉の　仁保基子
あはれちりうくにはたつたかな

水の上にちりてながるゝ木の葉こそ　吉弘周子
よどめるかたにつもるなりけれ

みづの上に月はくまなくてりながら　草賀きくの子
あめとちりしくきしのもみぢ葉

ひさかたの月てりわたる水のうへに　杉山ひさゝ子
うきねのとりとまがふもみぢ葉

波たちてさしもにしろき隅田かわも　荒井幾久子
さくらおちばにながれよとまん

瀧のかはふかくもゝみちたつぬれば　荒井滿武子
にしきゝそひておち葉ながるゝ

秋や來しすみたのいはのみなかみに　荒井千代子
おち葉ながれてにしきちりけり

常盤木もいけにうつりて紅葉はの　高塚佐多子
うかべるみづはにしきなりけり

山川にちりて流るゝもみぢばの　三輪和賀子
いろは一しほきよしうつくし

にはいけに浮てたゞよふ木の葉をば　荒井美和子
つりするあまのふれとこそ見め

あらしふき峯のもみぢはみたるれは　岩崎さし子
したゆくみづぞにしきおりなす

きのふけふいけの緋鯉のかずそふと　名取正代子
見しは木の葉のうかぶなりけり

さゝ波やしがのうらわのあらしには　中川芳尾子
ひらのたかねのもみじをぞ見る

くれなゐの糸もて織れるおびなれば　北島松子
もみぢ散りうくたにがはのみづ

さゝ浪もたゝて淀みたるいけの面に　北島操子
ふたは三は四はうかぶもみぢは

もみぢばのちりうきしより紅の　北島功子
さゝなみよするにはのいけみつ

くみすてゝ置しひさごもみねぬまで　尾倉益子
もみぢにうつむやまの井のみつ

こがらしに峯のもみぢのちりしきて　金原玉枝子
にしきをさらすこがれゐのみつ

月と共にやどせしかけをやまの井の　和田徳子
そこひもわかずもみぢみたるゝ

たつた姫おりけんにしき散りおちて　金山ゆき子
くれなゐはそむやまがはのみづ

ふくかぜにもみぢはちりて池みづは　徳永萬壽子

にしきにつゝむかゞみさそみろ　徳永廣子

ながれゆく小川のみづもにしきして
そこひもみゆずもみぢしがらむ　徳永識子

はしり出の小かはにかよふ木の葉ふれ
今朝のあらしのなごりなるらん　毛馬内優子

たに川のきよきながれの見ゆるまて
ちりてはよさむやまもみち葉　平野文子

せりつみし春のゆくゑもしらかはの
みづにうかぶはもみぢなりけり　松原かつ子

夜あらしにたへてや散りし紅葉はに
いけのみきはもにきはひにけり　服部倫子

山おろしふきくるこころはたにかはの
みづのおもにぞにしきしきける　那賀昌子

ちりかゝる園のゐさら井くむときは
もみぢのふれのけかぬひぞなき　虎口資子

水の面にうかぶ木の葉をながむれば
ぬれてひさし匠いろまさりけり　佐々小琴子

さる澤のいけのかゞみをくもらせて
やなき葉うかぶあさぼらけかな　佐々有鄰子

木からしのなごりをみせて色いろの
木の葉うかべるやまの井のみづ　溝口貞子

こゝろなき水もあきをはをしみてや
いせきにからむもみちなるらん　久野春子

法の師の阿伽くむひまもなきまてに
木の葉ふりつむやまの井のみつ　久野久和子

二荒やまみれのあらしやきそひけむ
もみちながるゝたにかはのみづ

さゝ波や志賀のうらかせふき荒れて
つきかけくろくちろ木の葉かな　久野蝶子

水こりのたちしあさのみのこりけり
木の葉ふりつむさろさはのいけ　久野しゆう子

たつた川なかるゝみつのもみち葉は
みむろのあきのなこりなりけり　永井さい子

よべまでは月をうつせしいけみづに
かげをへたてゝうくおちはかな　戸賀崎治子

空やみづみづやうらかさみわかぬに
なかをへたてゝ浮くおち葉かな　高橋松江子

なかれゆくかはせの水もよさむまて
やまの木のははちりつもるなり　萩原章子

池のおもはなへてにしきを敷にけり
かせにちりかふ木々のもみちに　稲原董子

池みづのこゝろも知らてよあらしに
ちりておち葉のうき名立つらん　竹村竹里子

前かはのきよきなれを出て見れは
木の葉のふれのながれゆくかな　輕部壽子

なかれゆく秋のさまりやこゝならん
にしきをたゝむよさのかはなみ　西川順子



十一月二十日兼題

豊年を祝ふ文

地

大阪市北區中ノ島六丁目　松尾せい子

袖ひぢて、早苗うゑしは、昨日と思ふに、いつしかも、山田の稲は刈りほされ、ひこばえてほに出でぬるひつぢさへ、霜の花と變はり行くも神の惠なれや。其の御あたり御揃ひ遊ばし、御健勝に渡らせられ、殊に、この秋は御田の穂なみ靜にて、鳴子にさわぐ風もなく、御收穫もいとゞまさらせ給ひし由、御家ひろきためしとおよろこび申上候。こゝにも、皆々恙なく心もなごやかに過し候。申すもかしこけれど、古の帝も、みことのらせ給ひけるよ。民の富は即ち國の富たりと。豊かなる御代の秋こそ、大みいづいやまさらせ給ふはじめかと存じ候。この御聖代に、いにし天保の饑饉の如きかなしき事は侍らざらめれど、おの／＼かねて、こゝろしらひなくてやは。千早振神のみまへにみしめ引きはへ、祝ひうたふ遠里の聲、瑞穂かしぐ烟り賑はふ市のさま、うれしさの餘り、後るゝ雁のつばさにかけて、ほぎごと申まゐらするになん。かしこ。

人

東京駒込區東片町百三十九番地　北島功子

千町田に早苗とりしは、きのふと思ひはべりしに、いとはやも、今は、晩稲をさへ刈りはてたまひぬとか。日頃怠りの身の、今さらに矢のごとき月日のかげにおどろかれ侍り。今年は、さして强き暴風もなく、氣候もいと程よきものから、いづ地も、おしなべて我が日の本の國の名のみつほの秋の幸みえぬと、ほのかに傳へきくぞうれしき。古き世より、農は國の基といひつたへらるゝとか。されば、上はやむごとなききはより、下は糟糠の民にいたるまで、玉の緒のおやともめで用ゐるものにしあれば、世の人のいふなる、黄金や玉の寶とは異り、み國を富ますの第一とて、實に豊年ばかりいとも尊くいとも目出度きはあらじとこそ。かへす／＼も、嬉しさのあまりひと言ことほぎまゐらするになん。あなかしこ。

（以下原稿到着順）

佐久間八重子

秋の最中の收り獲れ時にし侍れば、文の林にたどらせ給ふ御身も、定めし、さり／＼に事しげくそおはすらむ。風の便りに承りはべれば、今年は、木の芽はる春の始より、五風十雨の惠、いさあまねく、あらがねの土地すく國の本たる民草は、培ひ耨りの業

いと便りよう、秋の初めには、少しの野分ありしかど、いまゝかの障りにはならざりきとや。然れば、出來秋は、最みづ〳〵どう、田の面は、宛ら、黄金の雲の立居せるが如しとなむ。ぜしがらき園の巷とは、打異なりて、錦なす御土地は、一入の御さがねと、うらやましうなむ。いと、畏き　天皇陛下の民たる吾々は、そもこも、いつも〳〵、此くなむとは、思ひ侍れど、嘸かし、彧、人々はいといいと打喜び給ひて、いと有がたき、君の御代字歌ひはやし、豊なる年をことほぎ、いとにぎ〳〵敷業も擧げられむと、遙に祝ひ上げ侍るになむ。あなかしこ。

中村貴和子

秋も既に暮れて、朝夕は、隙漏る風の、そゝろに寒うなれるに、御地の住居よ。いかに。巷もおはさぬにか冬とはいへ、都は、人の群れ喚ぐ聲、馬車などの馳する音、絶ゆる時無く、其の埃の風に吹かれて亂れ立つなど、いはんかたなくくろし。御地は、見るもの聞くものさう〳〵しく、わきて、立田姫の裝束など、露霜毎に一入染めや增さらんと、思ひやられて、いとも羨しうなむ。されば、開くる御代とて、諸の業、皆日に進み月に改まれる中にも、田作る業は、一層の進みにて、自然の災も人の術にて防がれ、彼の、旱、霖雨、蝗、風など、わづかにても至らんには、直に飢饉とも、なりし、古と異なり。秋の收獲も、おのづから倍せる、いとも、御國の幸と喜ばしきことに、こそあれ。まして、今年は、春より氣候も順に、五日に風吹き、十日に雨降りて、稻のできはひは、高田も、沼田も、稔波の畔に溢れしとか。實に、滿舞の喜び、滿車の樂み、限りやなからんと、影ながら祝ひことぼくになん。御地の、朝には紅葉の錦に飽かれ、夕には、雁が音、蟲の聲に醉はるるすさびには、定めて、みやびの言の葉も多からんめれば、ちと聞かせてよ。あなかしこ。

此の頃は、いかにすごさせ給ふ。まつ、みけしきうけたまはらまほしうならむ。此方皆々かはりなうこそ。今年は、いつこも〳〵、近年まれなる豊作に侍りとかや。いとも〳〵目出度事になむ。あはれこれとまなすも大君のふかき御めくみの露にうるほひて、百性等のいそしみはげむと、時候のよきとによれは成けりと、いつも〳〵、まなしくらし侍り。まつは、人なみにつゝしみてほきことまをすになむ。筆のつたなきは、れいのみ心もてゆるしたまへかしあなめてた。

關[illegible]勝子

明けく治る御世のためしとはいへ、近年は、打續き少しも不作の年とてはなく、いつも〳〵豊年なから、今年は、とりわけ豊作にて、我地方のたみくさのよろこびを打聞とへ、數ならぬ身も、いさゝうれしうこそ侍れ。されは、何事にまれ、よき事にはまつ兩太神宮に參詣するのならひとて、この豊作を祝ひまつらむと、互に打つれ立、又は一村打そろひて參宮するなと、其のよろこびの程は、拙き筆にはつくしがたし。これも、ひとへに我大君の大御みめくみと、皇太神のみまもりとによるならんと、その總參宮の數にはもれぬ身の、うれしさをかくなん。

御巫ふし子

都をば遠くはなれし山里のいとも淋しき御すまゐ、然りながら、浮世のちりもはらはれし心地すとうけたまはりたるだに御羨らやましく、そゞろに御許の慕はしくなむ。げに都を花に申せども、中々に、田舍の景色こそ好ましけれ。見渡す限り野ら廣々と、遠近の山々見わ渡り、岸べに匂ふ草花など、いと愛らしきものにぞある。春には、定めし、朝夕のそゞろ歩きのおりかゝる所をながめ、あるは、兒等に交りて、蝶をおひ花をもつみし事もおはすら

このゑ子

む、そが上に、本年は、おしなべて稲の出來ばえ殊の外宜敷て、豐けきしゐし穂に表れ、日々勞苦をなめし人々のよろこびは、然ることながら、我國人のかく可からざる常食品の、かくも充分なる收穫ありしときくだに、心ゆかしき極みになむ。君には、頃日は、農夫共のよろこぶ聲をも聞かせられ、又野邊をも見そなはす時の御心地など、おしはかりまゐらせ候、げに、榮え行く日の本のいや益々に富み行くこと、民草のもろ共にことほぐになむ。先は、拙なき筆もて御祝迄にかくなむ。

久代さく子

秋も、やうやく深くなりゆくまゝに、落葉の木かげにすゞしかりし風も、今ははや、朝な夕なは、いさゞ身にしむばかりになり侍り。御許様には、此頃を如何にすぐさせ給ふにか。御氣色伺ひ奉りたくこそ。さて、今年は、れいにもまして、我國の農産物の、ゆたかに實れる由、新聞の上にも見えつるに、已れ等先きつ頃、友垣と郊外へそゞろあるきせし折も、かり取られたる稲の實のり殊外によろしく、いやが上にも、稲束のつまれたるを見るにつけ、御地もまた豐作なりきとの事、げにもと思はれて、こよなう嬉ばしうなむ。まして、農夫の風吹く朝、雨降夕べも、倦み怠るけはひなく、朝に露を踏で出で、夕には星を戴きてかへり、一すぢに秋の實を祈りつゝ、其業にいそしみし功の顯れて、うれしき今日にめぐりあひたる、かの人々の嬉び如何あらん。妾等、學の窓にいりしむ者、田畑の業にはたづさはらずとも、諸人の嬉び歌ふを聞きて、いかで、共に祝はでやはあなかしこ。

櫻井靜江子

漸やくに秋の半ばに相成り候て、朝な夕な、吹きくる風に寒さを覺え、あるは、木の葉の落つるなどにつけても、いかに渡らせ給ふらむと御案じ參らせ候。定めし、御許様はじめ皆々様、御機嫌

うるはしう入らせられ候ふ事と、折からの菊のかほりの千歳をかけて、御よろこび參らせ候。下て、わらはも恙なく日毎に學の窓に勤しみ侍れば、御心安め給ひてよ。昨日、友と二人立ちて、近き里のあたり、眺めありき候ひし折、甘々しき稲をかりまして、重たげに農夫の往き通ひつるに逢ひしゆゑ、今年は豐年なりやいかにと尋ね候ひしに、彼の人は、今年は近頃にまれなる豐年に候ふとて、いと喜ばしげなる面もちにて答へられ候ひしが、御地は、嘶、厄日と中す折にも御さはりは之れなく、瑞穂の國の名に負ひて、八束穂の足穂にみのり、さては、御刈り収め給ひつらむ。治まる御代のめぐみとはいへ、苗代小田の土かへ水はぐゝみより、早苗とりての後までも、水の引き加減、あるは、案山子鳴子の御世話など萬につけて御心つかはせられし事ならではと、御丹精のほど、察ては御心づくしの甲斐ありて、御喜びの程幾何かりかさふらむ・妾は、日々紅塵百尺といふ中に生活致し居り候に引きかへ、御もとさまには、のどやかに清き御すまゐに渡らせられ、うらやましう存じ參らせ候。わざとにはなくとも、此のあたり御越し給はゞ、所せき伏屋もよぎり給へてよ。先は、豐年の御喜びにまで、一筆雁の便りにかくなむ。めでたくかしこ。

淺井ゆき子

秋の氣色もやう〳〵深うなり侍り。朝な夕なの風もいさゞ。堪へがたく身にしむ折から、如何わたらせ給ふらん。伺ひまゐらするになん。次に妾事も、これぞとも無く明し暮し居候まゝ、ゆめゆめ、み心にかけさせ給ふまじく、一重にねぎまつる。さて、都の住居は、うつろひゆく木の葉の色に、時節を知るのみにて、錦織りかく四方山の紅葉も、黄金しくなす田の面のをしれも、皆よその物とならし侍り。かゝる身に候へば、事の様を細り侍るべくも

候はれど、家に出入するひな人の、今年こそは、近年に無き豊年に侍り。門田の稲は八束穂にしなひて、我等の喜びはたとふるに物なくなんなど、したり顔に物語るを聞き侍り候て、いでや、農の業に、其の水上を尋ぬれば、遠き神世に流れ出しとかにて其の時より　千とせを經て、明らかに治まれるみ代の今日に至るまで、むねとするなりはひになん。されは、かしこくも、御世代々の天皇は、四つの時の分ち無く、大御心を民の爲めにつくさせられゆたけき秋の初穂をもて、先づ伊勢の大神を祭らせられ、天地の御神にそなへ給ひて、はじめてきこしめさるとこそ承り侍れ。秋の田のさかねは、げに、國民の父にまします　天皇を初めまゐらせて、四方の御民らの喜びはいかばかりならんと思へば、うれしさの身にしむ心地こそし侍れ。四方のけしきにもそむきて、都のちりにうずもれ居る妾故に、御家のわたり幾里となくつらなれる田の面のをしれに、おく露の朝日の光りにてりそひて、つらぬきとめぬ玉の散りたらん如き氣色のしのばれて、これぞやがて御國の光りなるものをと、思ひつゞけられ侍り。それにつけても、かゝるけしきを御眼のあたりにもてはやし、御民らのうれしさうたふ諧聲を、御耳に近く聞き給ふ御身の上こそ、限りなう御うらやましうこそ。うれしさの餘りに、つたなき一首をかくなん。越路の雁も夜風の寒さに鳴きわたる頃に候へば、くれぐれも御身を御大切になされ給へかし。あなかしこ。

石井季子

先日は、わざわざ當附近の稲作概況を御尋ねに相成候處、今年は氣候順當なる上、虫害等の患もさしたる事なく、何地迄も豊穣の由に御座候。別して當村近邊は、宜數出來にて、只少々の（ウンカ）とか申虫發生いたし候へ共、是とて炎天水も煮ゆる際、田の草を取り、又一方には、害虫驅除に夜もすがら心を傷むる農民等に

いかで勝たれ申すべくや。幾程も無く皆撲滅いたし候。追々實も能くのり、色つき初めてよりは、只々刈入れに忙しき計りに御座候。豊年の嬉しさにや、小童等に至る迄、節面白く何やらん謡ひつゝ、己がじゝ業にいそしみ居候。右は、一寸御返事迄。めでたくかしこ。

徳永廣子

山里もすめば都とやらん言の葉、げに身にしみ侍り。すぎしころより、はるけき都のそらに住なれしも、こひしさあまる故郷の、いかでわするべき。御身にも、かはらせなう父母君の御ひざもとに、たのしく家事をつとめさせたまふらん。朝な夕なに、御うはさし侍り。昨日今日とく起き出みれば、初霜のおきつることのめづらしきものから、今年は、いづこの田畑も、いとゆたかにうるはしく實のりしよし、人のうはさもことさら耳にこたへてきこえ侍り。かねて名に高き肥後地方は、一しほ五月雨のころより、人の骨をりししるしのあらはれて、いかにたのしかるらん。新にかり收めし初穂の米を神にさゝげ奉りて、豊年を祝たまふならんと、只獨、君が里わのなつかしくうれしうのせらるゝまゝ、祝ひ奉るになん。かしこ。

松原かつ子

今年は氣候順に從ひて、處々の國々、近ごろになき稲の出來ばえよきよしにて、富士のみやまに鶴のすくひしは、豊年の前兆なりとて人々の祝ひしは、たがはざりき。御地は、また、ことの外たりほのいねのゆたかにみのりしとうけたまはりて、皆々様の御祝ひのほども、さぞかしと御察し申上、めでたく祝しまゐらせ候。かしこ。

佐々有鄰子

本年の秋の空は、二百十日の風の音もなく、いともしづかなる年

にしありければ、八束穂の千穎八百穎、馬に車にひきもきらず刈入るなるべし。爰は、年久しく故郷をはなれて、紅塵ふかき京の空になすこともなくして、文道をたどれども、奥かなきはむ力もなく、昇校するのみなるに、君があたりは、豊年祭や新嘗祭あるなるべく、新醪の酒くみかはし、うたひ舞ひ、八平手うちかはし、御代の長秋を祝ひたまふなるべし。あな目出たの大御代を、爰もはるかに祝ひ奉りて、雁の使にとつて〻かくなも。かしこ。

十一月三日

清水てふ子

うら〳〵と昇る朝日の影は、戸ごとに掲げし日の御旗に映じて世の中、ゆたかに賑はしく、家ごとに人ごとに、すべて心をかたむけ盡して祝ひ賀ふ。是なん、十一月三日天長節のありさまなりける。謹みて思ひみれば、明らけく治まれる御代の恵みは、蝦夷千島のはてより、屋久沖縄さては人を食ひしさふ臺灣のほとりまでも、覆ひ被ふらぬきはもなし。かゝる聖代に生れ出でたる身の幸こそ限りなけれ。いでや、學の庭におもむきて、登榮のぼる御光を、八洲の海のかぎりなく祝ひまつらんと、親しき友どちと式場に集ひぬ。さて、定の時もいたりしかば、校長をはじめ學監諸先生と、恭しく御尊影を拜し奉り、奉祝の唱歌をうたひ、勅語捧讀を謹聽し、次に、君が代の唱歌に、なほ千代に八千代にさゞれ石のいはほとなりて苔のむすまで、榮ゆまさむとを祝ぎ奉り次に、校長より、御聖德のたぐふべき方もなき、かしこきおほん例を承りき。つく〳〵おもへば、めぐみの露のかゝらずは、民くさ、いかで榮ゆべき。思しき身なりとて、やがて人ともならば、いさゝか君にむくひ奉らんと思ふ事を、今日なむこゝにかくは記しぬ。

堀内ふさ子

十一月三日は、我が大君の御あれまし、いともめでたき日なり。軒に立てたる日の御旗は、昇る朝日にかゞやきあひて千代萬代にひまさむ祥瑞のほども、いと著し。やすらけく、月に日に榮ゆ行く御世に生れ出てゝ、人なみに學びの道を辿るも皆大君の御蔭なりかし。

むら雲もこゝろもともにうちはれて
君が代いはふ今日の樂しさ

されば、我校にても、奉祝の式をあげられしかば、形の如くおごそかに行ひをはりて後、校長は、我が大君の民草をあはれませ給ふあつき大御心について談話せられたり。其のあらましを書きつくれば、明治六年宮居炎上せしとありし時なりき。大君には三條公に宣はせ玉ひけるやうは、今、火災の爲めに我が宮やけたれどもにはかに多くの資を投じて新築等をすべからず、國用多端のをりから更に又朕が皇居の爲めに民をくるしむることなかれさて赤阪なる紀州侯の邸をもて假宮にせさせ給ひぬ。古き建築にて朽ちたるところさへありければ、畏き御上のかゝるところにおはしまさせ玉はむは、衛生の道にもかなはせられずやと、更に、皇居造營の御事を請ひ奉しに民は皆かゝるこころにすまふさいふを朕ひさりぬりとて何の事かあらむとて遂に聽したまはざりきとて、明治廿二年にいたりてはしめて今の大宮にはうつらせたまひけり。又、日清戦爭の際なりき。廣島に大營を進めさせ玉ひしが、平和克復に至るまで御軍服をぬがせ給はず兵士と艱苦を供にせさせ玉ひしを、其のたとしへなき御鴻德のくさ〴〵を擧げられたりき。今更ならぬおほへとながら、いかで〳〵萬分の一をも報い奉らでやはと、今更のごとくに身も心もふるはれぬ。即ち、家に歸りてこの記を作り、以つて、後のいましめ草とす。

高地こう子

天長節は申すも畏かれど　天皇陛下の御誕辰にして多くの民草の、かしこみ祝ひて千代八千代と壽きまつる佳節なり。今日は、明治卅三年の其のよき日なり。あきらけく治る御代のしるしにや。空ものどかに晴れ渡り、和氣天地の間にみちて、萬民は申すも更なり。鳥獸草木さへも、すべていさたのしげなり。定の時間より、わが校に於ける奉祝の式場につらなりしが、校長の君よりいと畏き御話をうけたまはりしにつけ、いでや、宮城を拜し、觀兵式御還幸の盛儀を拜し、萬歲を祝し奉らばやと、學校より歸るや否や、直に姉さともに二重橋のほとりに行きぬ。町々のありさまいとにぎ〳〵しく軒端にひらめく國旗は、胡蝶の春天に遊ふが如く人々は、皆、はらつゞみを打ちて太平を歌へり。二重橋の前には、群集山の如く、吾れ〳〵もさいしめきしも、還幸の御行列見ねしより、御稜威の光にあびて、おのづから、しづかになりうや〳〵しく奉祝の意を表し、陛下の千代萬代を常盤の松の齢に思ひくらべて我が家にかへりぬ。

佐々豊水

明治卅三年十月二十一日肥後國熊本市に
東宮殿下の御着輦を拜み奉りて
　日嗣の皇太子の今日のみゆきを
やひらでをうちてをろがむ劔太刀
十月二十二日出水神社の神苑に殿下の行啓を
社頭より拜み奉りて
いさぎよくわきて出水の神社の
　神いかばかりみゆきまちけん
十二月十三日熊本市より
殿下の御發輦を拜み奉りて

熊本の城の上の松もおもむろに
　皇太子をおくりて風むせぶなり　佐々豊水

東宮殿下の熊本市に御着輦を
拜み奉りて　仁保基子

春のみやのくもゐのみかげあきらけく
　あほぎまつらふこゝのかしこさ　徳永萬壽子

おもひきやつくしのはての里ひとも
　日つぎのみこをながむべしとは　吉弘周子

つくしがたさほき浦曲のはてまでも
　日つぎのみこのみゆきかしこき

日のみこのひかりかしこくあほぐ哉
　こゝろつくしに生るたみくさ　宗盛子

日のみこのひかりかしこくあほぐ哉
　こゝろつくしに生るたみくさ　中村武子

朝日子のひかりあまれくかゝれ世に
　うまれ來し身のさちぞふかゝる　佐々有鄰子

はし立の熊本市のいちはやく
　みこのみゆきをながむかしこさ

九月十三夜の月を見て　徳永則子

教の庭

山のはにかたふきかゝるのちの夜の
つきのかげこそめづべかりけれ
吉富彦子

夕きりはいつしかはれてやまのはに
すみこそわたれのちの夜のつき
村上昌子

後の夜のつきはますみのかゞみかも
みそらにくものちりもかゝらず
松永信子

いさましくはしろくろまのなか月は
かげもひかりものりてこそゆけ
井口素子

玉杵名のささのながめもまさやかに
すみわたりたるのちの夜のつき
受楽院圓子

にしきなすまがきの菊のつゆの上に
かげさしかはすのちの夜のつき
佐々有鄰子

市なかのちりをしづめてのちの夜の
つきかげきよくすみわたるなり
龜甲智子

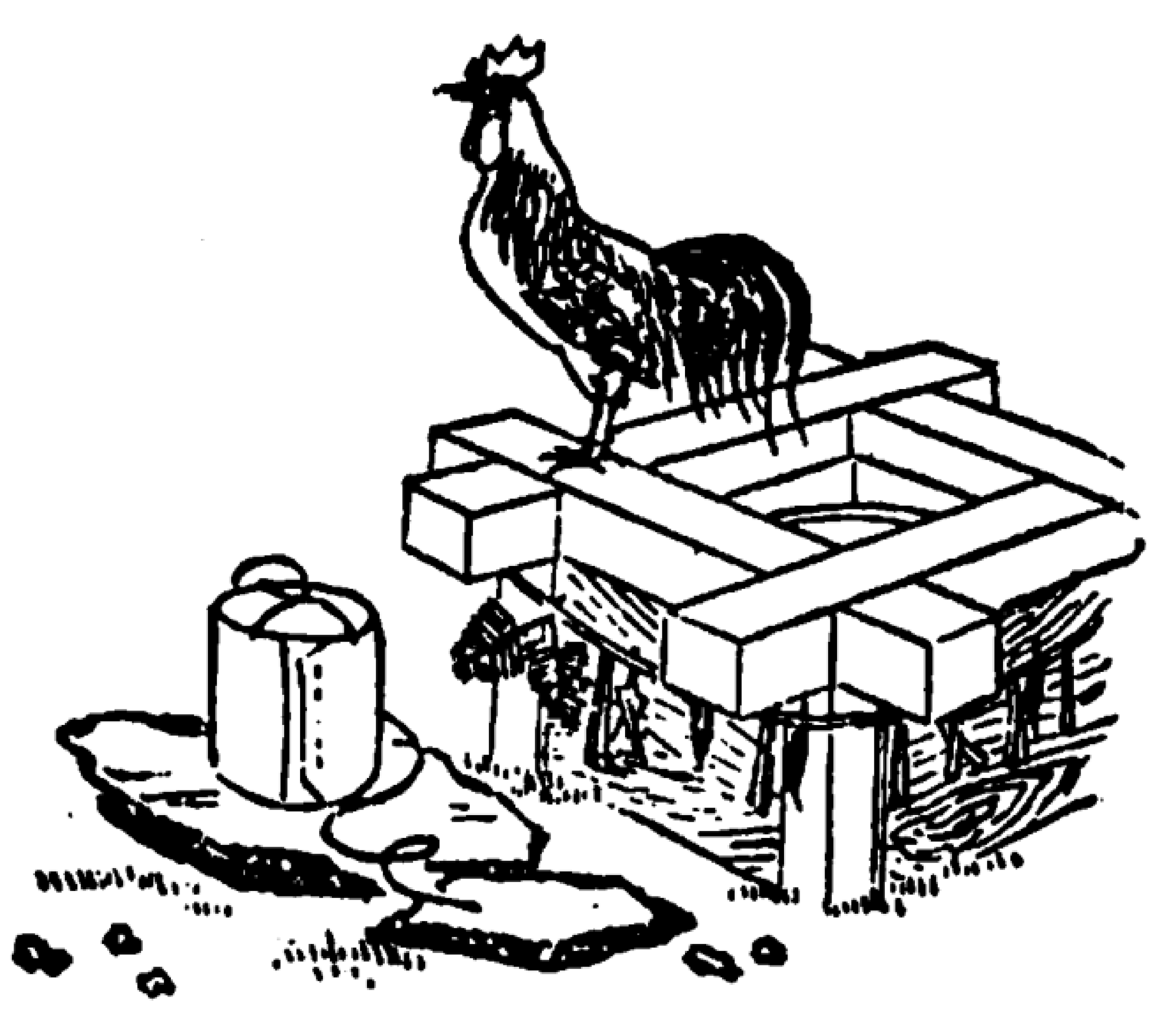
村くもはあとなくはれてやまのはに
さやけくすめるのちの夜のつき

初紅葉

露しくれ木々のこずゑをおしなべて
あかれのいろに初めにけるかな

雁

おのがさもよひかはしつゝはつかりの
鳥羽田のおもに今ぞおちくる
尾倉益子



家庭の鑑

菊版美本
全一冊

定價金拾八錢
郵税金四錢

本書は章を親子、兄弟、夫婦、繼母、嫂、養子、師弟、主從、朋友、寡婦、の十章に分ち明治の現代に於ける忠孝節義友愛貞操等の事實を詳叙せるものにして句々血を吐き言々人の肺腑を貫き讀むものをして感奮興起感極つて殆泣かしめむとするものあり書中收むる所のもの或は勅定の綠綬褒賞を賜り或は地方の美事として旌表せられたるものなれば皆是人の子弟婦妻の摸範に供すべき事實なり之に加ふるに婉麗哀痛の筆を以て事實を精密に寫したれば其情味の津々たる實に小説を讀むが如く身恰其地にありて其境に臨める感あり今や刻成りて出版す世の教育家父兄及子弟婦妻の坐右には一日も此可憐の書册無かる可らず家庭及學校にも亦必此種の册子を備へさる可らず、

發行所 東京市京橋區築地二丁目廿一番地（電話新橋八八） 國光社

社告　女鑑每月五日、廿日、發行

定價			代金	領收	照會	廣告料	
一冊	拾錢	全國無遞送	通貨又は郵便小爲替、銀行爲替及通運便にて御拂込の事拂込は、郵便爲替、拂渡局は東京新富町郵便受取所、受取人は東京南傳馬町一丁目七番地靜思館宛、郵劵代用一割增	別に領收證を出さず金員領收の上は直に女鑑を發送すべし若强ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料又は端書封入の事	編輯上に關する件は「東京市京橋區築地二丁目二十一番地國光社編輯部宛」○會計上に關する件は東京京橋區南傳馬町一丁目七番地靜思館宛照會は返信用切手封入若くは往復葉書にあらざれば回答せず◎未納郵の來書は一切受取らず	一行（五號活字廿三字詰）	金二拾五錢
六冊（三ヶ月分）	五拾五錢					半頁（一行三十詰）	金六圓
十二冊（半年分）	壹圓					一頁（二段六十行）	金拾圓
						料金は前納、位置は申込の順により組み込む	

明治三十三年十一月十九日印刷
明治三十三年十一月二十日發行

編輯兼發行人　東京市京橋區築地二丁目二十一番地　川崎直衛
印刷人　東京市京橋區南八丁堀一丁目十一番地　並木頁雄
發行所　國光社
發賣元　東京京橋區南傳馬町一丁目七番地　靜思館　電話本局一千三百七番

明治三十三年十一月廿日發行
女鑑
毎月二回五日廿日發行 第二百拾七號
明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

東京築地二丁目株式合資會社國光社印刷部印刷